O U D E L K A
クーデルカ
叫喚の館
是方那穂子
ファミ通文庫

是方那穂子
Naoko Korekata

7月26日生まれ。東京在住。北里大学医学部中退。小学館パレットノベル大賞佳作受賞でデビュー。主な作品に「冬の人魚姫」（小学館パレット文庫）「原宿Aからはじまる」（学研レモン文庫）「女神異聞録ペルソナ～シャドウメイズ～」（アスペクトノベルス）「レブス～神に見捨てられた聖女(マドンナ)～」「シルバー事件 case#4.5 フェイス」（ファミ通文庫）など。

岩原裕二
Yuuji Iwahara

1972年生まれ。北海道出身。北海道綜合美術専門学校を卒業後、株式会社ハドソンに入社。「ボンバーマン94」（PCE）「鬼神童子ZENKI」（PCFX）の企画とメインデザインを担当する。退社後は、細々と漫画を描きながら生活し、「クーデルカ」（PS）のキャラクターデザインに参加、上京する。現在「エースネクスト」誌上で、同名漫画を連載中。

カバーイラスト 岩原裕二

エドワード・プランケット

EDWARD PLUNKETT

20歳●1878年～1957年

英国ロンドン生まれ。名家に育ったが愛情に恵まれない幼少時代を過ごす。在籍していた大学を辞め、アテのない放浪の旅を続ける。

クーデルカ・イアサント

KOUDELKA IASANT

19歳●1879年～没年不詳

英国ウェールズ地方の田舎・アバージノルウィンの寒村に生れる。幼い頃から強い霊能力を持ち、様々な怪異な現象を巻き起こすため、呪われた存在として村を追放された過去を持つ。

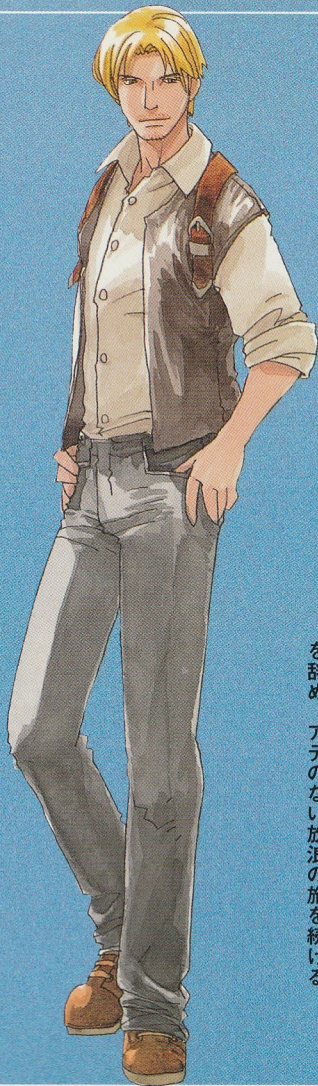
クーデルカ

叫喚の館

是方那穂子

ファミ通文庫

ジェームズ・オフラハティー

JAMES O'FLAHERTY

1845年～没年不詳
カトリック教会神父。アイルランドの商家に生れ、英国の大学で知識を学び、その後、ヴァチカンに入り。敬虔さが買われ司教となる。在として村を追放された過去を持つ。

目次

プロローグ
1898年・10月初旬　ロンドン

この町に住む人々は、中心地で大きく蛇行するテムズの流れを境界線として、二つの階層に分かれている。
バッキンガム宮殿やウエストミンスター大聖堂、国会議事堂などが威厳と優雅さを持って立ち並ぶ北西部は、王候貴族を始め上流貴族たちの住まうアッパーサイド。
そして南東部は、イースト・エンドと呼ばれる下町である。
マッチ箱のような家々が湿った路地を挟んできちぎちと建ち、煙突から吐き出される煤煙と馬車の車輪の巻き上げる砂埃(すなぼこり)に覆われた、鈍色にくすんだ町並み。
大英帝国の栄光は、世界の果てほども離れたオーストラリア大陸にまで届いているが、その莫大な富はロンドンの東の果てまでも届かない。
彼女は、陰鬱(いんうつ)な町の色合いに合わせたような暗灰色のマントで全身を覆い、フードをすっ

ぽりかぶった姿で、馬車と人とでごった返す通りを急ぎ足に歩いていた。

日没直後の薄闇が、辺りを包んでいる。

軒を並べたパブや安宿の窓々には、ぼんやりとしたランプの明りが点り始めた。

ふいに、彼女は角を曲がり、狭い路地へと入っていった。

背後から何者かが後を付けてくる気配には、大通りを歩いているときから気付いていた。だから暗い路地に入ったとたんに何者かが襲いかかってきたときにも、相手がこちらに触れるより早く、行動に出ることができた。

振り向きざまにマントを脱ぎすて、追跡者に投げ付けた。絡み付いた布は相手の視界を遮り、体の自由を奪った。もがく相手の脇をすり抜け、後ろに回る。向こう脛を強く蹴り上げると、相手は獣のようにうめいて、握っていたナイフを取り落とした。

路上に倒れ込みながら、手探りにナイフを探す相手の手の甲を、彼女は女物のブーツの細い踵で打ち付けた。パリリと骨の砕ける音がした。

獣のようなうめきが、鋭い悲鳴に変わった。

ぎりぎりと踏み付けながら、相手を覆うマントを剝いだ。

路地の入り口から差し込むガス灯の明りを頼りに、襲撃者の姿を確認する。

ずんぐりした体型の男だ。ぶよぶよとたるんだ二重顎に、無精髭が汚らしく生えている。

息の臭いを嗅ぐまでもなく、辺り中にアルコールの臭いが漂っている。

「酔っ払いね。女が欲しいんだったら、違う場所で捜して」

吐き捨てるようにそう言って、男の手の甲を路面に張り付けている踵を引き抜いた。男は再度、悲鳴を上げた。

「ちくしょう。お前が、インチキ占いなんかしやがったせいで、俺はあのホテルを追い出されちまった！　覚えてろ。いつか、仕返ししてやるからな！」

歩き始めた彼女の背後で、男が怒鳴った。

彼女は立ち止まり、振り向いて男の顔を見下ろした。

「ああ、この前の。そう言えばこんなマヌケ面、してたわね」

ようやく思い出したという表情で、そう言った。

先週、彼女がドーバー海岸近くで商売をしていたときのこと。とあるホテルで宿泊客の所持金が部屋から紛失したという事件があった。疑いを掛けられたホテルのメイドが、近くに観光客目当ての占いの店を広げていた彼女に「真犯人を探してほしい」と泣き付いてきたのだ。彼女の占いによれば、古株のボーイが犯人だという結果が出た。ボーイは否定したが、彼の部屋を調べると、なくなった客の財布を始め、他にも高価な宝石類など、盗品と思しき物が、ざくざく出てきたのだ。当然、ボーイはその場で解雇された。

それが、今、手の甲から血を流して、路上に転がっている男だった。

「こんな所で会うなんて、奇遇ね。でも、次に会ったときには奇遇じゃすまさないわ。そっちこそ、覚えておくのね。いくらあんたがアルコール漬けのロクデナシでも、ジプシーの呪いがどんなものだか、聞いたことぐらいあるはずよ」

彼女は冷たい口調で言い放ち、マントの埃を軽く払って、フワリと羽織り直した。

男が悪態を突くのが聞こえたが、彼女は何の注意も払わずに、路地を出た。

川沿いにあるパブの二階が、彼女のロンドンでのねぐらだった。

酒場を兼ねた、安いだけが取り柄のしけた宿だ。階段を上ると、六室ほどの部屋が薄い壁に仕切られて並んでいる。

一番奥まで廊下を歩き、立て付けの悪いのドアを開ける。中には粗末なベッドとサイドテーブル、それに扉の壊れたクロゼットがあるだけの狭い部屋だ。

階下から響いてくる酒場の喧騒を聞きながら、彼女はテーブルの上のランプに火を点した。

隙間風に揺れる頼りない明りが、壁紙の染みを照らし出し、貧乏臭い部屋をいっそう陰気に見せる。

一瞬、彼女の瞳が、ランプの光に琥珀色にきらめいた。

彼女はクーデルカ・イアサント。

いささか荒っぽい気性に不似合いな細い手足と白い肌をしてはいるが、各地を渡り歩いては占いをして生計を立てている、流れ者である。

彼女はベッドに乱暴に腰を下ろした。

マントを脱ぎ捨て、その下に身に着けた短い革の上着のポケットから、何かを取り出した。

かなりくたびれた、黒い革製の財布だった。それは先ほど、あの男ともみ合ったときに、素早く掏り取った物だった。

片手にのせて計ると、なかなかの重みがある。クーデルカは満足そうに微笑んだ。

中身を手っ取り早く、ベッドカバーの上にぶちまける。

一ポンド銀貨が一枚、残りはペニー銅貨ばかりだ。

「チッ、シケてるわ。どうせ相変わらずコソ泥でもしてるんだろうし、結構、持ってるんじゃないかと思ったんだけど。——それにしては、重いわね」

最後に、財布からころりと転がり出た物がある。

大ぶりのブローチだった。

拾い上げて、しげしげと眺めてみる。

細かい細工を施された金の枠に、ピンク色のカメオがはめ込まれている。横に長い楕円形

で、彼女の掌（てのひら）より一回りほど小さいだろうか。この手の物としては、だいぶ大きい部類に入るだろう。

カメオの表面には、長い髪の若い女が微笑む顔が、浮き彫りにされている。その細工の精巧さから見ても、かなり高価なものだろう。これを売り飛ばせば、しばらくは遊んで暮らせそうだ。

彼女は軽く、口笛を吹いた。

「案の定ね。どこで盗んできたものやら。どう見ても、貴族の女の持ち物ね。あたしみたいな階層の女には、一生手の届かないようなモノ。とにかく、明日はさっさとここを離れたほうがいいかも。奴がこれを取り返しにくると、面倒（めんどう）だし。でも、あんな奴の手にあるよりは、あたしのほうが、少しはお似合いよね。あんたもそう思うでしょ？」

クーデルカは上機嫌で、カメオに彫られた女に話し掛けた。

ベッドの上に広げた金を集めて自分の財布に納め、ブローチはカードなどの商売道具を入れて持ち歩く布製の物入れにしまう。掏り取った財布は、窓から投げ捨てた。

その夜、彼女は早々に眠りに就（つ）いた。

夜中に、フッと目が覚めた。

空気に潜（ひそ）む異様な気配を、全身に感じる。

目を開けると、今にも触れんばかりの近さで、血の気の引いた白い顔がのぞき込んでいた。相手の長い金の髪が落ちかかり、頬（ほほ）に冷たく触れている。どこかで見たような気がする顔だと思ったが、思い出せない。

まるで現実のようにリアルだが、過去の経験から、それが生身の人間ではないことをクーデルカは知っていた。

相手はじっとこちらを凝視している。目を逸（そ）らしたくても、こちらはぴくりとも体を動かすことはできない。まばたきさえも、できなかった。

やがて、相手の整った小さな唇が動いて、吐息のような言葉が吐き出された。

『助けて』

それに続いて一つの地名を告げると、その姿は徐々に薄くなり、消えた。

同時に、体の縛めが解けた。

クーデルカは、息を荒げてベッドの上で体を起こした。

どれだけの間、あの女の幽霊と見つめ合っていたろう。永遠のようでもあり、ほんの一瞬であったようでもある。

部屋がほんのりと明るいのに気付いて、窓を見る。埃にくもったガラス越しに、夜明け前の、ブルーグレイに染まった空が見えた。

クーデルカは裸足のままベッドを降りた。窓辺へ向かって歩き出したとき、何か硬い物が足先に当たった。

床を探って、拾い上げる。

しっかりしまい込んであったはずの、カメオのブローチだった。

「そうか、この顔だ」

見覚えがあると思ったあの幽霊の顔は、カメオに彫られた女のものだった。

「――ウェールズ、アバーズワース。ネメトン修道院」

クーデルカはブローチを見つめたまま、つぶやいた。

それは幽霊が言い残した場所だった。

そこに一体、何があると言うのか。

「なんだか知らないけど、次の行き先だけは決まったみたいね――」

クーデルカは、溜め息混じりにそう言った。

やがてブローチを元のようにしまい込み、身支度を整え始めた。

I．10月31日　午前7時

海沿いの断崖を望む丘の頂上まで登り詰めたところで、クーデルカは馬を止めた。

見下ろすと、丘のふもとはまだ、辺り一面が朝靄に覆われていた。

しかし眺めるうちに、白い靄の中から、高い尖塔が見え始めた。

辺りが晴れていくに従って、徐々に、修道院の黒々とした建物群が姿を現し始める。

広大な敷地の外縁に沿って建てられた館が建物群全体の外壁を成し、その内側にさらに幾つかの建物があるようだ。

ここからではっきりとはわからないが、断崖を背にしてひときわ高くそびえる鐘塔のある建物は、ゴシック様式の大聖堂かと思われた。

そこまで確認すると、クーデルカは手綱を巡らせ、ためらう事なく岩だらけの斜面を馬で駆け降りた。

修道院の外周を取り巻くように建つ館の外壁は石造りで、ところどころに見える細長い窓

には、鉄格子が取り付けられていた。

館は左右にずっと続いており、右側は断崖でとぎれている。

左側を見ると、石のアーチに大扉のはめ込まれた門が見えた。

クーデルカは、門の正面へ回り、馬を降りた。

見上げるほどの高さのある門は、長い年月の雨風にさらされているらしく、鉄の金具は錆（さび）が浮いている。

それでも、ちょっとやそっとの外敵にはビクともしない風情で、大扉は固く閉じていた。

古びたノッカーに指をかけ、何度か打ち付けてみた。

しかし虚（うつ）ろに音が響くばかりで、誰かが出てくる気配もない。

しばらく叩き続けてみたが、無駄のようだ。

結局、彼女は門をあきらめ、他の入り口を探すことにした。

馬の手綱を引き、壁に沿って進んでみる。少し行くと、壁はゆるくカーブを描き、向こう側へとさらに続いている。

角を曲がると、その先に、人の肩ほどの高さに、一本のロープが下がっているのが目に入った。

それは館の屋根から垂れており、海からの風に頼りなげに揺れていた。

ロープを握って、何度か強く引いてみた。

きちんと固定されているようだ。太さも、人間一人を支えるには十分だろう。

少しの間、彼女は壁を見上げて考え込んだ。

やがて手綱を引いて館からはなれ、目に付いた貧弱な木立ちに馬をつないだ。それから、わずかばかりの手荷物を入れた、くたびれた革のバッグをおろし、肩に掛けた。

挨拶（あいさつ）代わりに馬の背を軽くなで、クーデルカは先ほどの壁の前に戻った。

ロープに両手をかけ、登り始めた。

館の外壁には、魔除けなのか、様々な奇怪な像のレリーフが取り付けられており、それが格好の足掛かりとなった。

屋根の上にたどり着き、用心深く辺りを見回しても、人の気配はなかった。

今、登ってきたロープは、尖塔の根元に結び付けられていた。

最初にこのロープを使った誰かがいるのだ。

まともにこの修道院に住んでいる者が、こんな物を使って出入りするとは考えられない。

密（ひそ）かにここへ入り込んだものが、彼女の他にもいるのだろう。

クーデルカは足音を潜めて、屋根の上を歩き始めた。

館は、どうやらきちんと手入れされてはいない様子で、屋根には苔（こけ）が生え、ところどころ

が腐り落ち、穴さえ開いている。
足もとに注意しながら歩いていると、突然、どこかで銃声が響いた。
屋根の下から聞こえたようだ。
ハッとして前方に目をやると、少し先に屋根窓があり、そこからかすかに明りが漏れている。
用心しながら歩み寄り、慎重にのぞき込んだ。
ガラスは土埃にくもっていたが、かろうじて中の様子をうかがうことができた。
真っ先に目に入ったのは、床の上に置かれた小さなランプの明りだった。
その弱々しい光に照らされて、屋根裏部屋の壁に金髪の男がもたれているのが見える。その左の胸から肩にかけて、白いシャツが引き裂かれ、べったりと血にまみれている。
右手には銃を構え、何かから必死に身を守ろうとしている様子だ。
男が銃口を向けた先に目をやって、クーデルカは思わず小さく声を上げた。
そこには巨大な、猟犬ほどの大きさのある鼠のような化け物がいた。
鼠は鋭い歯をむき出して低く構え、目を赤く光らせて、獲物の様子をうかがっている。
男は大量の出血によって、失神の一歩手前という状態に陥っているらしい。
銃を支えているのがやっとという様子で、すでに引き金を引く気力もないようだった。

チッと舌打ちをし、彼女は窓枠に手を掛けた。しかし、ビクともしない。

ためらう事なく、蹴破った。

派手な音を立ててガラスが砕け、窓枠ごと落下した。その直後、彼女自身も窓から飛び込んだ。

新手の獲物の突然の出現に、鼠は甲高い鳴き声を上げて、後足で立ち上がった。

クーデルカは壁際に駆け寄り、驚きの表情で見上げている男の手から、有無を言わさず拳銃をもぎ取った。

振り返って、ひるむ事なく鼠と正面から向かい合う。

銃を両手でしっかりと構えて照準を合わせ、引き金を引く。

轟音（ごうおん）と共に鼠の頭に穴が開いた。血と脳漿（のうしょう）とを飛び散らせながら、鼠は床に倒れた。

「いい腕だ」

かすれた声で、男が言った。

「アンタよりはね」

そっけなく答えて、クーデルカは男を見やった。

彼はさっきと同じ姿勢で、床に足を投げ出して、壁に寄り掛かっている。

立ち上がる気力もないらしいのだが、出血のために蒼白な顔に、余裕ありげな笑みを浮か

べている。

「かわいい顔して、言う事はキツいな。まあ確かに、あの化け物にいきなり襲いかかられて、腕がろくに動かなくなっちまってね。お陰で助かった」

「あのロープを吊ったのは、あなたね？」

「違うよ。俺が昨晩ここへ着いたときには、もうあった。それを使っただけだ。誰か他にも、ここに忍び込んでる奴がいるってことだな」

「ここで何をしてたの？　どう見ても、修道院に縁があるようには見えないけど」

いかにもうさん臭そうに、クーデルカは男をジロジロ眺めている。

まだ警戒心を解いたわけではない証拠に、いつでも構えられるように右手に銃を握ったままだ。

「お互いさまだろ。いろんな噂（うわさ）を聞いてね。ちょっとのぞきに忍び込んだら、このありさまだ。こんな化け物が、ここにはウヨウヨしてやがる」

「噂？　どんな？」

「いろいろさ。この迷路みたいな館だの、聖堂だののどこかに大金が隠されてる、とか。悪魔崇拝者の儀式の場所になってて、中には死体がザクザクある、とか。この修道院の今の持ち主が、金持ちだが筋金入りの変態で、娼婦を何人も連れ込んで閉じ込めハレムを作ってや

りたい放題らしい、とかな。俺も少し、この中を歩き回ったんだが、実際、うさん臭い場所だぜ」

「くだらない」

クーデルカは軽蔑（けいべつ）を込めて、吐き捨てた。

「そんな噂に釣られて来たのなら、さっさと出ていきなさい。ここにいたら、ロクなことにならないわ」

「いやに訳知り顔で言うじゃないか。あんた、何か知ってるのか？」

「知らないわ。でも、わかるの。感じるのよ。気が澱（よど）んでいるわ。ここには、邪悪な何かがある」

「気？　なんだそりゃ。そんなコドモダマシで追っ払おうとしても、そうはいかない。そんなに危ない場所なら、なぜあんたはここにいる？　そっちこそ、何しに来たんだ？」

「来たくて来たんじゃないわ。呼ばれたのよ」

「誰に」

「関係ないでしょ。とにかく、忠告だけはしたわ。ほら、銃を返すわよ。もう弾はないようだけど。死にたきゃ、いつまでもそこにいなさい」

冷たくそう言って、クーデルカは男の脇に銃を置き、歩き始めた。

「あ、おい、ちょっと待ってくれ！」

彼女はうるさそうな表情で、振り向いた。

「まだ、何か？」

「実は、逃げたくても、逃げられないんだよ。銃も構えられないっていうのは、冗談じゃない。もう、動けないんだ。すまないが、ちょっと、手を貸してくれないか」

それまで気楽そうに薄笑いを浮かべていた男の顔に、初めて真剣な表情が浮かんだ。

余裕ありげに格好をつける気力も、ついに尽きたらしい。

クーデルカは溜め息をつき、男の側に戻った。

床に膝を突き、彼の傷の具合を確かめる。

「爪でやられたの？」

「ああ」

傷は深く、まだ出血が続いている。

クーデルカは肩から胸にかけて走る傷口に手を触れた。

「痛えっ！」

「ちょっと黙って、じっとしてて」

クーデルカは目を閉じ、傷口に触れている右の掌に精神を集中させた。

ほんのりと、手に熱がこもっていくのがわかる。

「……う？」

男が驚きの声を上げた。裂けた傷口が、ゆっくりと閉じていくのだ。

数分後、クーデルカは目を開け、顔を上げた。

胸の傷はきれいに閉じていた。

血も止まり、皮膚には赤く盛り上がった跡が残っているだけだ。

彼は勢いよく立ち上がり、怪我の癒えた左腕を曲げたり伸ばしたりして、嬉しげに様子を見ている。

「すげえ。あんた、何者だ？」

その問いには答えずに、クーデルカは立ち上がった。

「もう、痛くはないはずよ。跡も、そのうち消えるわ。体が動くようにしてあげたんだから、さっさと消えなさい」

「冗談じゃない。せっかくこんな心強いパートナーができたのに、ここで引下がるバカがいるもんか。一緒に探検しようぜ、この館を」

クーデルカはあきれ顔で男を見た。

「パートナー!?　バカはあんたよ。だいたい、あたしがいつ、一緒に行くって言った!?」

男は彼女の言葉をまるで無視して、ランプを拾い上げると、向こう端にあるドアへ向けて歩き始める。

「行こうぜ。この屋根裏部屋には何もない。向こうに俺が登ってきたはしごがある」

クーデルカは少しの間、不機嫌な表情で突っ立っていた。しかし、やがて肩をすくめて、男の後を追った。

「そう言えば、まだ名乗ってもいなかった。俺はエドワード・プランケット。知り合いはエディと呼ぶ。あんたは？」

上機嫌で話しかけるエディに、クーデルカはブスッとして答える。

「クーデルカ・イアサント。知り合いはあたしを、『疫病神』って呼ぶわ」

「……そりゃ、結構な呼び名だ」

二人は今にも分解しそうにきしむはしごを降り、館の二階部分の廊下に出た。

窓がないので、朝だというのに暗く、エディの持った小さなランプだけが頼りだった。

両側に並んだドアをいくつか、開けてのぞいて見たが、とくにめぼしい物は見付からなかった。

どの部屋も、何年も人の手が入らずに放置されている様子だった。

窓は内側から板が打ち付けられてあり、家具にはどれにも厚く埃が積もっていた。調度品の様子から、ここは使用人たちの部屋のあった棟らしかった。
　かつてはここでも、たくさんの者が寝起きし、働いていたのだろう。
　廊下を行く間、陽気にしゃべり続けるエディと対照的に、クーデルカはほとんど彼を無視して、黙り込んでいた。
　少し歩いたところで、ふいに、クーデルカは足を止めた。
「どうした？」
「シッ、黙って。誰か、いるわ。こちらに近付いてくる」
「本当に？　すごいな、それも超能力でわかるのか？」
「あんた、本気でばかね。床の振動でわかるじゃない。一人でベラベラしゃべっているから、見逃すのよ」
　潜めた声で、クーデルカは答えた。
　やがて、廊下をきしませて誰かが歩く音が、はっきりと聞こえ始めた。
　確かに、こちらへ近付いてくる。
　先の角を曲がった向こうのようだ。
　エディは銃を構え、音の方向へ慎重に歩み寄る。

　素早く角の壁に張り付くと、そっと向こうの様子をうかがった。
「なんだ、じいさんだぜ。また化け物が出たかと思ったが」
　残念そうに、エディが言った。
「たぶんここの人でしょう。早く銃をしまって。怪しい者だと勘違いされると困るわ」
「じゅうぶん怪しいだろ、俺たち」
　そう言いながらも、エディは銃を収めた。
「そこに、誰かいるのか？」
　向こう側から、声が掛かった。
　クーデルカはエディを押しのけて前に進み出た。
「あたしたちは、怪しい者じゃないわ。あなたはここの人？」
　相手は大柄な男だった。髪もほおひげも白髪混じりの灰色で、老人と呼んでも差支（さしつか）えない年齢に見える。
　しかし、目付きは鋭く、体付きもがっしりとしており、まだまだ現役で力仕事もできそうだった。
「お前ら、何者だ？　勝手に入り込んでおいて、怪しい者じゃないだと？　一体どこから入った！」

ランプを掲げてこちらを見ながら、老人は、きびしい口調で問い正した。

「天窓から。無断で入ったことは謝るわ。正面の入り口で呼んでも、誰も出てこなかったから。どうしても、この館に用があったのよ。ここの事に詳しいのなら、いろいろ教えてほしいことがあるの。信用してくれない？」

老人は少しの間、いかにもうさん臭そうな目付きで、クーデルカとエディをジロジロと眺め回していた。

しかし、ふいにニッコリと、満面に人の良さそうな笑みを浮かべた。

「――まあ、良かろう。近頃、わしら夫婦も耳が遠くなってな。誰か来て門を叩いても、聞こえないこともある。それに何しろ、ここはこれだけ広いでな。何かここに用事があるなら、お前さんたちは客ということになる。下でゆっくり話を聞こう。ろくな物もないが、朝食でもどうかね？　わしに付いて来なさい」

老人は先に立って、廊下をもと来たほうへ戻り始めた。

「助かった。温かい食べ物にありつくのは久し振りだ。行こうぜ」

エディが浮かれた様子で言い、クーデルカを追い越して老人の後に付いて歩き始めた。

クーデルカはいぶかしげな表情で、ゆっくりとその後を追った。

老人はオグデンと名乗った。

妻と共にここに住み込んでいて、この館の持ち主から管理を任されていると、長い廊下を歩き、階段を下りながらオグデンは語った。

やがて、暖かな明りがドアの隙間から漏れている部屋の前に着いた。

何やらおいしそうな匂いも、漂ってくる。

「ここはもともと台所なんだが、わしらは大抵いつも、ここで過ごしとる。他にちゃんとわしらの部屋もあるが、老夫婦には、こんな広い館を動き回るのは面倒でな」

説明しながら、オグデンは簡素な木のドアを開ける。

正面に置かれた薪ストーブには明々と火が焚かれ、その上のヤカンから、白く湯気が吹き出している。

この部屋だけは窓が打ち付けられていることもなく、弱い朝の光がガラス越しに差し込んでいる。

「ベッシー！　お客だ。お茶の支度をしろ」

オグデンの声に応えて、奥のテーブルの後ろから、小柄な婦人が顔に笑みを浮かべて現れた。

「あらまあ。そんなに大声を出さなくても、聞こえますよ」

婦人はオグデンと同じぐらいの年回りだろうか。質素な衣類を身に着け、その上に白いエ

プロンを掛けている。
クーデルカたちの姿を見ると、婦人の顔からスッと笑顔が消えた。
「……あなた。お客って、この人たち？」
「そうだ。なんだ、その態度は。失礼だぞ。早くいつものように、『来客用』のスープとパンを出しなさい！」
「でも、あなた……」
「うるさい！　お客の前でゴチャゴチャ言うな！」
オグデンが怒鳴ると、婦人は引きつったような表情で、奥のほうへと引っ込んでいった。
「すまないな。あれが妻のベッシーだ。あいつは頭が堅くてな。あんたたちのような……、その、何と言うか、そういう身なりの連中を見ると、いい顔をせんのだ」
オグデンが椅子を勧めながら、二人に謝った。
埃まみれの革のジャケットを羽織ったクーデルカと、乾いて固まった血が染みついたシャツを着て腰に銃を吊っているエディ。
確かに二人の姿は、まともな暮らしをしている人物のようには見えなかった。
「気にしないで。まっとうな人たちにしかめっ面(つら)されるのは、慣れっこよ。暖かい部屋に入れただけで、十分だわ」

クーデルカは軽い口調でそう答えた。
「お気に召さなくて悪かったな。次に来るときゃ、夜会服でも着てくるか」
おもしろくなさそうな口調で言いながら、エディは足を投げ出して、古びた肘掛け椅子に座った。
やがてベッシーが、木のトレイに湯気の立つ深皿を二枚と、パンを入れたカゴを乗せて、戻ってきた。
「……さっきは、ごめんなさいね。外の人たちに会うことが、あまりないものだから……。ポテトのスープはお好き？」
目の前に置かれた皿から立ち上るスープの匂いに、エディは身を乗り出した。
素早くスプーンを手にして一口飲み、おおげさに溜め息をつく。
「うまい！　何言われようと、このスープで帳消しだな」
ベッシーは、なぜか悲しげに微笑んだ。
「そう？　よかったわ。いっぱい食べてね……。あら、あなた、少しも食べないのね。スープは嫌い？」
クーデルカの前に置かれた皿の中身は、さっきから少しも減っていなかった。
脇に置かれたスプーンに、手を伸ばそうとさえしていない。

「いえ。あたしたちの掟で、今日は水しか口にしてはいけないことになってるから。気にしないで」
「掟？　あなた、キリスト教徒じゃないのね？」
「見ればわからない？　あたしは占いを商売にして渡り歩くジプシーよ。キリストの教義にはない秘密の掟がたくさんあるわ」
　素っ気なくクーデルカは答えて、皿を押し戻した。
「なら、おれがいただくぜ」
　言うが早いが、エディがクーデルカの皿を横からさらって、瞬く間に空にした。
　クーデルカは冷たい表情でエディを見たが、何も言わなかった。
「それより、聞きたい事があるわ。このブローチに見覚えはない？」
　クーデルカは例のカメオのブローチを取り出して、テーブルの上に置いた。
　それを見て、オグデン夫婦は揃って息を飲んだ。
「そ、それは、パトリック様の……」
「黙れ、ベッシー！」
　ベッシーの言葉を、オグデンが遮った。
「どうしたの？　何か知ってるのね。知っているなら教えて」

「わしらは何も知らん！」
　ふいにオグデンは、顔を怒りで赤くして怒鳴った。
　クーデルカは驚いて黙り込んだ。
　オグデンはすぐに気を取り直したらしく、打って変わって親切そうな口調で話しかけてくる。
「いや、すまんすまん。年を取ると、気が短くなってな。何でもない事で、怒鳴り散らしたりしてしまう。ところでお前さんたち、しばらくここにいるつもりなら、部屋を用意しよう。一番近くの町からでも、ここまでは馬でだいぶかかる。疲れているだろう。荷物を置いて、ちょっとゆっくりしたらどうだ」
　クーデルカは一瞬、疑わしそうな表情でオグデンを見たが、すぐに素直にうなずいた。
「ありがとう。親切ね」
「なに、部屋だけはたくさんあるんだ、遠慮しなくてもいい。ロクなもてなしもできないが。それじゃあ、部屋の準備をしないとな。ベッシー！　早く、一緒に来なさい！」
　何か言いたげなベッシーを無理に急かして、オグデンは上機嫌で部屋を出ていった。
「意外に親切なジイさんだったな」
　スープとパンをきれいに平らげたエディが、満足そうな声でクーデルカに話しかける。

クーデルカはじっと、エディを見た。

「な、なんだよ」

「あんた、どこか具合悪くなったりしてこない?」

「さっきの傷を心配してくれてるのか。お陰で、もうすっかり元気だぜ」

「そうじゃないわ。さっきのスープ、毒が入ってた。かすかに毒草の臭いがした。あの臭いは特徴的だから、間違えっこない」

「悪い冗談はよせよ」

「冗談じゃないわ。どうしてあたしがスープを飲まなかったと思う?」

「だって、お前は掟がどうとかって……」

「あんなの、嘘っぱちよ」

エディは壁際へ走り寄ると、窓を開けて外へ身を乗り出した。

必死で吐こうとしているようだが、うまくいかないようだ。

「吐くんなら、指を思い切り喉の奥に突っ込みなさい。でも、あれは吸収がいいから、いまさら吐いても無駄だけど」

背後から、クーデルカが冷静な口調でそう言った。

エディは振り向いて、クーデルカをにらんだ。

「じゃあ、このまま死ねって言うのか!」

「それもいいけど、解毒剤もあるわ。欲しい?」

「そんなもんがあるなら、初めから言えよ!」

エディは怒りのこもった声で怒鳴った。

クーデルカは解毒剤を取り出し、エディに与えた。

エディはあわてて、一気にその粉薬を口に入れ、むせ返った。

「吐き出したら、何にもならないわよ。無理やりにでも、流し込みなさい」

クーデルカはテーブルの上の水差しを取り、差し出した。

エディはそれをひったくると、水差しから直接、水を飲んだ。

「――ひっでえ味だ――」

顔をしかめて、エディが言う。

「それで命が助かるんだから、我慢して。それより、早くこの部屋を出たほうがいいわね」

「逃げるのか? あんなジジイ、俺が取っ捕まえて白状させてやるぜ。なんで俺たちの命を狙ったのか」

「ここはあの人たちのテリトリーなのよ。何が起こるかわからない。今はとりあえず逃げて、もう少し探ってみたほうがいいわ」

不満そうなエディを無視して、クーデルカはドアノブに手を掛けた。
しかし鍵がかかっている。
「畜生！」
クーデルカは短く悪態を突いた。
「どいてな」
エディが進み出て、彼女を押し退ける。それから軽くはずみをつけて、思い切りドアを蹴った。
板が裂け、ドアがばたんと大きな音をたてて開いた。
クーデルカは呆れ顔でエディを見た。
「こんな大きな音がしたら、百キロ先にいたってあたしたちが逃げようとしてるってわかるわよ」
「いちいち、うるさい女だ」
二人が廊下に出ると、少し先にある階段からちょうどオグデンが駆け降りてくるところだった。ライフルを右手に持っている。
「そこを動くな！」
オグデンは叫ぶと、ライフルを構えて二人に銃口を向けた。

二人は物も言わずに、階段とは反対の方向へ廊下を駆け出した。
長い廊下を抜け、いくつかの階段を上り降りして、二人は逃げた。
背後で聞こえていた銃声も、そのうち聞こえなくなった。
いくら邸内に詳しくても、あの年では若い二人の脚力に追いつくのは不可能だったのだろう。
「振り切ったようだな」
「……そうね」
二人は足を止めて、あらためて辺りの様子を確かめた。
夢中で走るうちに、台所のあった棟はとうに抜けていた。
今いるのは建物と建物とをつなぐ回廊の入り口だった。
前を見ると回廊の途中に小さな扉がついていた。
壁との隙間からわずかな白い光が漏れている。
クーデルカが近寄って押してみると、扉は難なく開いた。
白い朝の光が一杯に差し込む。
薄闇に慣れていた目にはひどくまぶしく感じられた。
「ここは、温室？」

青臭い植物の匂いと、湿った土の匂いがする。
しきりにまばたきをしながら、クーデルカは明るい部屋を見渡した。
白いタイル張りの床は、到る所が暗緑色の苔ともカビともつかないものに覆われている。
壁と天井はガラス張りだが、外側からは土埃に、内側からは伸び放題の植物の葉や蔓(つる)に覆われている。
中央には、小さな枯れた噴水があった。
大理石の水盤には腐った水が溜まり、表面には苔がついている。
奥には、ひときわ高く伸び、鬱蒼(うっそう)と葉を茂らせた奇妙な植物が生えていて、視界を遮っている。
その後ろから、ふいに枝をかき分けて、黒服の男が姿を現した。
彼はクーデルカたちの姿を見て、驚いた表情でその場に立ちすくんだ。
「お前たちは――、魔物か!?」
その言葉を聞いて、エディはムッとした顔をする。
「誰が魔物だよ。そっちこそカビの生えた牧師の幽霊かよ」
「失敬な。私はカトリックの司教だ。プロテスタントの伝導師と一緒にするな」
男は植物の根をまたいで、大股にこちらへ歩いてくる。

「魔物でないなら、何者だ？　身なりからして、あまりまともな人種にも見えないが」
いかにも疑わしそうな目付きで、彼はジロジロとエディとクーデルカを眺め回した。
「なんだと？　どいつもこいつも、お高くとまりやがって。この化け物屋敷に出入りするには、王候陛下の許可でもいるってのか!?」
エディが怒鳴り、今にも銃を抜きそうに身構えた。
「やはりな。その口の聞き方では、ロクな者ではないだろう。あのオグデン夫婦が、よくお前たちのような者をここへ入れたな」
「お前も、あのジジイとグルか！　なら、容赦しないぜ」
殺気立つエディを、クーデルカが脇から押しとどめた。
「ちょっと待ちなさいよ、エディ。よくわからないんだけど、あんた、カトリックの司教って言ってたけど、ここの住人じゃないの？」
クーデルカは男に尋ねた。
「人に物を尋ねるときは、まず自分が先に名乗るのが礼儀というものだろう」
男は偉そうに、そう答えた。
「このくそジジイ、とっととくたばれ」と言いたいところをぐっとこらえて、クーデルカは引きつった笑みを浮かべた。

「あたしはクーデルカ・イアサント。こっちのはエドワード・プランケット。お察しの通りの流れ者よ。さあ、あんたは？」
「わたしは、ジェームズ・オフラハティー。カトリックの司教だ。昨晩、ここに到着した」
「昨晩？　ってことは、ここに泊まったの？」
「当然だ。もう遅くなってから、突然ここを訪れたわたしをあの管理人のオグデン夫婦が、手厚くもてなしてくれたよ」
「あんた、正面の門から入ったのね？」
「当然だ。他にどこから入る。――もしやお前たちは、門から入らず、勝手にここへ入り込んだのか？」
「まあ、そうね。いくら門で呼んでも、管理人夫婦は出てこなかった。だからここは今、空き家なんだと思ったわ。まさか人が住んでいるとは思わなかった」
「嘘をつくな！　どうせ、何か金目の物でも盗み出そうとして、入り込んだのだろう！　汚らしい罪人め！」
「うるせえな。俺たちが強盗だったら、あんたもあの管理人夫婦も、とっくに撃ち殺してるところだぜ」
エディが吐き捨てるように、そう言った。

「確かに勝手に入り込んだのは悪かったけど、殺されるほどのことはしてないわ。あんたは一晩ここにいて、あの管理人夫婦に何かされずにすんだの？」
クーデルカの言葉に、オフラハティーは眉を顰（ひそ）めた。
「なんだと？」
「あの管理人夫婦は、あたしたちを殺そうとしたのよ。上の廊下であたしたちを見付けると、親切そうに部屋まで招いて、毒入りスープでもてなしてくれたわ。おまけにその後は、ライフルでにぎやかな歓迎よ」
「馬鹿な事を言うな！　お前たちのような者の言う事など、信じられん！　大体お前たちは、盗みが目的ではないのなら、何をしにここに入り込んだのだ」
「ちょっとした冒険さ」
エディが馬鹿にしたような笑みを浮かべて、答えた。
「あたしは……、呼ばれたのよ」
クーデルカの答えに、司教は首を傾げた。
「呼ばれた？　オグデン夫婦にか？」
「違うわ。……金髪の女。誰だかわからないけど、この場所に関係がある人物よ。オグデン夫婦の知り合いのようだけど、今のところは何もわからない」

「訳のわからない話だな。もっとちゃんと、筋道を立てて説明できないのか。無学な者はこれだから」

「それじゃあ、無学なあたしたちにもわかるように、あんたがここに来た理由を教えてよ。さっき『魔物』って言ったわね。あんたもこの屋敷が化け物屋敷だってことは、もうわかっているんでしょ。なのにどうして、一人で、うろついているわけ？」

オフラハティーは一瞬、言葉に詰まった。

「……それは。そう、頼まれたのだ、オグデン夫妻に。この邸内の魔物を神の力で退治してほしいと」

「ふうん、神の力、ね」

クーデルカは一応うなずいたが、内心、相手の言葉をまるで信用していなかった。

司教と言えば、カトリック教会の中でもかなり上位の聖職者である。そのような立場の者が、たった一人でこんな場所を訪ねてくるからには、何かもっと重要な用件があるに違いない。

『あたしたちのような下賤な者には、簡単に話すはずがないわね』

クーデルカは心の内でつぶやいた。

「クーデルカ、行こうぜ。こんなオヤジは放っておけ。そのうち化け物が片付けてくれる。

俺は、何で命を狙われたのか、早く突き止めたい。あのオグデンは、何か重大な事を隠してるんだろう。ここに出る化け物どもと、つるんでるかもしれないぜ。化けの皮を剝いで、とっちめてやる」

エディが廊下に通じるドアに向かって歩き出しながら、言った。

クーデルカは少し考え、やがてオフラハティーに話しかけた。

「司教さん。もし、あんたがここを探索しているんなら、あたしたちと一緒に来ない？」

「クーデルカ！　冗談じゃないぜ。俺はお断りだ、こんな奴と一緒なんて」

エディが不満の声を上げる。

オフラハティーは険しい表情で、拒絶した。

「こちらも断る。なぜ私が、お前たちと行動を共にしなければならないのだ」

「さっきエディが言った通りよ。一人じゃ、ほぼ確実にそのうち化け物にやられる。人数は多いほうが心強いはず」

クーデルカは冷静な口調で説明した。

オフラハティーは眉間に皺を寄せて考え込んでいたが、やがてひどく不機嫌な表情でうなずいた。

「確かに私も、先ほど魔物に出くわしたときには、危ないところだった。神の威光をもって

追い払ったがね。いくら粗暴なお前たちでも、魔物の前では心細いのだろう。――よかろう。お前たちと行動を共にしてやろう」

その言葉を聞いて、エディが顔をしかめた。

「ケッ。とことん、偉そうなオヤジだぜ」

一行は温室を出て、回廊を先へ進んだ。

窓のない場所も多く、あってもそのほとんどが板で打ち付けられている。そのため、今は昼間であるにもかかわらず、手持ちのランプは欠かせなかった。

増改築を重ねられているらしい建物群は、唐突に出現する渡り廊下や間に合わせのようなドアなどで、ひどくアンバランスにつながっていた。

「ここから先は、また別棟のようだな」

先に立って歩いていたエディが、外れかかった粗末な扉の向こうをのぞいてそう言った。

足を踏み入れると、得体の知れない異臭がふっと鼻を突いた。

クーデルカは敏感に反応して、辺りを見回したが、とくにこれといって臭いのもとになるような物は見当たらなかった。

「変な臭いがしない？」

クーデルカが言うと、エディが鼻をひくつかせた。

「これは、墓場の臭いみたいだな」

「いい加減なこと言わないでよ」

「本当さ。何か動物の肉が腐ると、こんな臭いがする。そこらに死体が転がってるぜ、きっと。怖けりゃ、俺にしがみついててもいいんだぜ」

「馬鹿言ってんじゃないわよ。死人だの幽霊だのが怖くて、占い師が努まるとでも思っているの？」

行く手の廊下は細く、今まで以上に薄暗い。

「ここは、構造からすると、修道院の宿舎だったのかもしれないな」

オフラハティーがランプで辺りを照らしながら、そう言った。

確かに、今までの建物に比べると壁もズラッと並んだドアも、何の装飾もなく簡素に作られ、ところどころに質素な十字架が、埃まみれのまま放置されていた。

細い廊下を少し行くと、いきなり広間に出た。先ほどから漂っていた異臭が、一段と強くなる。

ランプの明りに照らし出されたその光景に、三人は一瞬、言葉を失った。

そこは広さだけはあるが、窓もなく、天井の低い陰気な部屋だった。

しかし一同が驚いたのは、そんな事ではなかった。
染みの浮き出た壁には錆びた金具が打ち付けられ、そこから枷のついた鎖が下がっている。床には奇妙な形をした様々の器具が散らばっていた。
そして中央には、巨大な、人間が一人、すっぽり入るほどの鉄の鳥籠のような物が置かれ、その中には、白っぽい布の塊が入っている。
クーデルカは、鳥籠に歩み寄った。
「これは……」
「死体、だな。ミイラ化してる」
近くで見ると、朽ちた布の塊と見えた物は、当の昔に干涸びた遺骸だった。ドレスを身に着けたまま、ミイラ化している。
「どうしてこんな物が？　ここは修道院ではないのか⁉」
オフラハティーが嫌悪の表情もあらわに叫ぶ。
クーデルカは籠の鉄格子の隙間から、中をのぞき込んだ。
籠の扉は、固く錠が下ろされていた。
「このドレス、黄ばんで黒い染みが付いてるけど、ウェディングドレスみたい。ほら、ベールまで落ちてるわ。一体どうして、こんな姿でこんな場所に……」

つぶやきながら、クーデルカは手を伸ばして、くしゃくしゃに破れ果ててミイラに絡まっているベールに触れた。
その途端、ある光景が見えた。
場所はこの部屋だが、今よりはだいぶ新しく見える。数か所に松明が掲げられ、壁の鎖には、数人の半裸の男がつながれている。男たちは皆一様に、見える限りの皮膚を傷に覆われ、声もなく頭をうなだれている。
中央に置かれた巨大な鳥籠は、まだ鋼鉄の色が青く、錆も浮いていない。
その中に、埃にまみれたウェディングドレスをまとった黒髪の女が入れられている。女は鉄格子を両手でつかみ、身を乗り出して、半狂乱で泣き叫んでいた。
鳥籠の前には、一人の男が、床に押さえ付けられている。
男はきらびやかな衣装をまとっているが、今はそれらはあちこちが破け乱れている。
鳥籠の脇に立って様子を見ていた人物が、片手を上げた。同時に、斧が降り下ろされ、押さえ付けられていた男の首が、ごろりと床に転がった。
血飛沫が上がり、身を乗り出していた女の白いドレスに転々と赤く、染みが付いた。
女は、絶叫した。

「おい、どうした！」

クーデルカは、肩をつかんで間近に顔をのぞき込んでいるエディを、ぼんやりと見上げる。

「――いきなり、兵士が何人もで、踏み込んで来たわ。結婚式の朝に。私はすっかり準備も終えて、あの人が到着するのを待っていた。反逆罪だと、一族すべてが捕らえられて、ここへ連れてこられた。みんな、死んだ。殺された。あの人の首が床に転がって、あの人の血が私のドレスを染めた。私はここで、ずっとここで、あの人と一緒に、ずっと――」

そう口走ると、ふいに、クーデルカはがくりと首をうなだれた。

「何を言っている？　しっかりしろ、クーデルカ！」

次に顔を上げたときには、いつもの彼女に戻っていた。

「大丈夫よ。そんなにグラグラ揺すられたら、首が抜けるわ。……ここは、昔、牢獄だった。きっと、修道院として使われなくなった後の話ね。密かに重罪人をここに連れてきては拷問し、処刑していた。この人は結婚式の当日に、一族郎党、反逆罪でここに連れてこられた。この檻に入れられ、目の前で婚約者を殺され気が触れて死んだ。死んだ後も、そのまま放置されてこんな姿になったのよ」

エディは驚いてクーデルカの顔を見詰めた。

「なぜそんな事がわかる？」

「わかるのよ。あたしには、人に見えないものが見える。聞きたくなくとも、声が聞こえる。見たくもない未来、吐き気のしそうな過去、亡者の声、ロクでもない物ばかりよ」

「亡者の声が聞こえると？　さすが異教徒の言う事だ。いかにもうさん臭い」

軽蔑した口調で、オフラハティーが言った。

クーデルカはキッと、彼をにらんだ。

「信じないのは勝手よ。お偉い司教様にわかってもらおうとは、思わない」

「俺は信じるぜ。オッサンよ、この娘は、手を触れるだけで、傷を治しちまうんだぜ。幽霊の一つや二つ、見えたって別に不思議はないな」

オフラハティーは眉間に皺を寄せた。

「触れるだけで傷を治す？　主の奇跡でも起こらない限り、そんな事はできるものか」

オフラハティーはそう言い捨てる。

クーデルカは溜め息をついたが、何も言い返そうとはしなかった。黙って、先に立って歩き出す。オフラハティーも不機嫌な表情のまま、その後に続く。

「ちぇ、ガンコなジジイ」

エディはそうつぶやき、二人の後に付いて歩き始めた。

広間を抜けると、先は再び細い廊下になっている。そこへ足を踏み入れると、さっきからずっと漂っていたあの異様な臭いが、ますます強くなった。

「それにしても、ひでえ臭いだな。本気で、化け物に食われた死体がそこらにあるんじゃないか？」

そう言いながら、エディがドアの壊れた部屋の入り口にランプをかざし、中をのぞき込んだ。

「うっ」

エディがうめき声を上げた。

「何？」

クーデルカも彼の後ろから、ドアの向こうをのぞき込む。そして、言葉を失った。

暗い部屋の中には、幾つもの死体が、転がっていた。

強烈な腐敗臭は、それらの遺体から発せられていた。

「こ、これは――。これも、処刑された者たちの死体なのだろうか」

オフラハティーが、誰にともなく問い掛ける。

クーデルカは首を横に振った。

「ちがうと思うわ。さっきのミイラは、もう何十年も放置されていた結果、ああなったのよ。

大昔の話だわ。それに、あのオグデン夫婦の話を信じるなら、ここは今、お金持ちが買い取って住居にしている。かつてのように、牢獄としては使われていないはず」

「オグデン？ あんなヤツの言う事など、信用できるものか。きっと、あの管理人が、毒でも飲ませて殺したんだぜ。俺たちにしたように」

エディが強い口調で決め付けた。

「馬鹿な事を言うな。さっきからお前は、あの夫婦が人殺しだと決め付けているが、毒を盛られたという確かな証拠がどこにあるんだ？ どうもお前たちの言う事は、信用ならない」

「てめえこそ、二言めには、俺たちを馬鹿にしやがって！ 何様だよ！」

オフラハティーとエディは口論を始めた。

クーデルカは強烈な腐敗臭に耐えながら、部屋の中へ足を踏み入れた。

死体は、まだ原形を留めている新しい物もあり、また、腐敗が進み骨が露出している物もある。

中には、何か大きな動物に内臓が引き出され食い荒らされたものもあった。

「どうだ、クーデルカ？ お前はどう思う」

廊下から、エディが声を掛けた。

「わからないわ。管理人たちに殺されたのかもしれないし、化け物に食われたのかもしれな

い。身なりからすると、みんなあたしたちみたいな流れ者のようね」
クーデルカは廊下へ戻り、他の部屋ものぞいてみた。
「他の部屋にもある。腐った死体が。誰かがここを、死体捨て場にしてるのかも。一体、ここで、何が起こっているっていうのか……。とにかく、ここを早く抜けたいわ。これ以上この臭いを嗅いでいたら、頭がおかしくなる」
クーデルカは早足で、廊下を歩き出した。
両脇にドアの並んだ廊下を抜け、角を曲がると階段がある。下ると、少し広めの空間になっていた。
かつては玄関ホールだったのであろうと思われるが、今は正面の扉部分を取り去って、渡り廊下でさらに別の棟へつながっていた。
「まさに迷路ね」
薄暗がりになっている向こう側の棟を透かして眺めながら、クーデルカがつぶやく。
そのとき、どこからか、かすかに歌声が聞こえてきた。
『おかあさまがわたしをころした
おとうさまはわたしをたべてる
にいさんねえさんおとうといもうと
テーブルのしたでほねをひろって
つめたいいしのおはかにうめる』
（マザー・グースのうた第三集／谷川俊太郎訳／草思社刊）
細い声が、童謡を歌っている。
「マザー・グースか。子供の声みたいだな。まさかこんな化け物屋敷に、子供がいるのか？」
エディが不思議そうに言って、辺りを見回した。
声は渡り廊下につながる出口の反対側、修道院宿舎の一階部分へ玄関ホールを戻った方向から聞こえてくる。
声の方向に目を凝らすと、廊下の奥、薄闇の中に小さな人影が立っているのが、ぼんやりと見えた。少女のようだ。
向こうでも、一同の姿に気付いたらしい。歌を止め、こちらの様子をうかがうような仕草を見せた。
「こんなとこで、どうしたんだ？　どこの子だ、お前？」
エディが声を掛ける。

少女はこちらへ歩み寄ってきたが、数メートル手前で立ち止まった。
年の頃は10歳ぐらいだろうか。片手に首の取れた人形の腕を持ってぶら下げている。
銀色の長い髪に赤いリボンを結び、白いレースで縁取りをしたピンク色のベルベットの服を身に着けていた。
その身なりから、少女が良い家柄の出身であることが、うかがうことができる。
少女は何も答えず、じっとこちらを見ていた。
その宝石のような鮮やかなブルーの瞳には、冷たい憎悪の光が浮かんでいる。
小さく整った顔は、ビスクドールのように凍り付いたまま、ピクリとも動かない。
唐突に、少女は首の取れた人形を床に投げた。
人形は、一度は床の上に転がったが、信じ難い事に、ゆっくりと立ち上がった。かた、かた、と靴音を立てて、驚いて見つめる一同の側まで歩み寄る。そしてその小さな両手でエディの足にしっかりとしがみついた。
「う、うわっ！」
悲鳴を上げて振り払おうとしても、人形は、マメ粒ほどに小さな爪をズボンの布地にしっかりと食い込ませて、離さない。
「こ、こいつ、離れねえ！」

エディが叫ぶ声に重なって、ぎしっと、大きく床板のきしむ音がした。
クーデルカはハッとして、反射的に数歩、あとずさった。
「皆、死んじゃえ！」
少女が鋭く叫ぶのと同時に、大音響を立てて玄関ホールの床板が大きく裂けた。
クーデルカの爪先数センチの所からホールの床板がごっそりと抜け、エディとオフラハティーは床下へ落下した。
もうもうと土埃が舞い上がった。
クーデルカは腕で顔を覆って、それを避けた。
数分後、辺りが収まった頃合を見はからって顔を上げた。
クーデルカの足もとにはポッカリと暗闇が口を開け、遥か下には崩れ落ちた板や木材が山を成している。エディとオフラハティーの姿は、ここからではよくわからない。
「あんたも死ねばよかったのに」
静まり返った中に、あざけるような細い声が響いた。
クーデルカはハッとして声のほうを見た。
ホールの天井近くの暗い空間に、銀髪の少女が浮いていた。
冷たく凍り付いた憎悪の表情で、こちらを見下ろしている。

クーデルカは悲しげな瞳で少女を見詰め返し、静かに問い掛けた。
「あんたの名前は？　あたしはクーデルカ」
「あたしはシャルロッテ。でもそんなこと知っても、何の意味もないでしょ。だってあたしは死んでるの。あんたももうすぐ死ぬの。ただの死体になるの」
くすくす、とシャルロッテは笑った。
「……あんたは、どうしていつまでもここにいるの？」
少女はぴくりと眉を震わせた。
「そんなの、知らない。気が付いたら、あたしはここにいたもの。それからずっと、いるわ。あたしの記憶は、いつも暗闇の中。カビ臭い空気と、血の臭い。夜になると、鎖がガチャガチャいって、重い鉄扉がきしむ音がする。誰かがまた連れてこられた。悲鳴とうめき声がする。誰かが今夜も殺される——。ここに入ってきたものは、誰も出られないの」
「そう。あんたもここの監獄に、囚われていたのね？　こんなに小さいのに、なぜ？」
「だって、あたしは誰にも愛されない子供だから。愛されなかった罪で、ここに入れられたの。生まれてからずっと、あたしの記憶はこの闇の中。そして九歳で、冷たい斧で首を切り離された。でもそれからも、ずっとここにいる。あたしはどこにも行けない。
だってあたしを待ってる人なんて、どこにもいない……。誰にも愛されなかったあたしを、

神様だって、愛してくれるはずないもの。ずっと、ずうっと、ここの暗闇の中にいなきゃいけないのよ」
シャルロッテの言葉に、胸が痛んだ。
クーデルカ自身の、つらい過去の記憶がよみがえる。
幼い頃から、クーデルカは不思議な能力を発揮し、周囲を驚かせていた。
彼女たちジプシーは、占いやまじないを日常的に行い、信じている。
一族の中には、未来を言い当てたり、霊媒としての能力を持つ者が、他にも何人かいた。
しかしクーデルカの力は、飛び抜けていた。
ほんの片言をしゃべり始めた頃から、クーデルカは暗闇に潜む幽霊たちの声を聞き、人の未来を言い当てた。
幼い彼女の予知の的中率に、村の人々は初めは驚き、その力を褒めそやした。彼女が占い師として有名になれば、彼ら一族も、もっと豊かに暮らせるようになるだろうと、周囲の者たちは噂した。
しかし、その力のあまりの強さに、徐々に人々はクーデルカを避けるようになっていった。
クーデルカの予知は、ときに過酷な未来を言い当てた。
悪魔憑きだ、魔物のとりかえ子だ、という噂が流れ、仲間外れにされ、石を投げられた。

やがては実の母親からも疎まれるようになり、彼女はいつも独りぼっちだった。
愛されなかった罪で牢獄に入れられたのだと語る少女の亡霊に、クーデルカは幼い頃の自分の姿を重ね合わせていた。
「ずっとここにいなきゃいけないなんて、そんな事ないはずよ。あんたはもう、どこにでも行けるはず。ここに囚われていたのは、あんたの体だけ。あんたが心を開けば、ここから出る道は、きっとすぐに見付かるわ」
クーデルカは、熱心にシャルロッテに語り掛けた。
「そんなの、ウソ!!」
少女は一言叫んで、フッと姿を消した。
「待って!」
呼び止めたが、すでに暗い空間には誰もいなかった。
その代わり、クーデルカの声に応えるように、床に開いた穴の中から低いうめき声がした。
彼女は慎重に穴の縁に歩み寄り、手持ちのランプを差し出して床下を照らした。
瓦礫（がれき）の山の中から、エディの頭が現れた。
彼は悪態を突きながら、積もった廃材をかき分けて起き上がった。
「死んでなかったの？」

クーデルカが、からかい混じりに声を掛けた。
「そうらしいな」
うなるように、エディは答えた。
埃まみれで不機嫌のどん底のような表情だが、ケガはないようだ。
「あきれた。ケガ一つないの。殺しても死なないって、あんたのことね」
「黙れ。それより、ここに、今にも天国に行っちまいそうなのが埋まってるぜ。どうする？このオヤジ、何かとうるさいから、天国でも地獄でも行かしとくか？」
エディが倒れた柱を動かすと、下からオフラハティーの黒い上着が現れた。
「神父が？　でも、まだ生きてるのね？」
エディはオフラハティーの上から他の廃材を取り退け、軽く揺（ゆ）すった。
「ああ。息はある。でも、目を覚まさないな。頭でも打ったんだろう。それに脚が折れてるみたいだぜ。ひどい血だ。放っとこうぜ。俺一人なら、何とかそっちに登れるだろう。クーデルカ、そこらに何か、ロープみたいなもんはないか？」
どこか楽しげに、冷たい笑みまで浮かべて、エディは言う。
「いくら嫌な奴でも、死にそうなのを見捨てていくって言うの？　あんたって、最低ね！そこで待ってて！　今、あたしがそっちに降りるから」

クーデルカは床下に向けて怒鳴ると、辺りを見回した。
玄関ホールには、壁に背の高い窓が並んでいた。
ガラス部分は板でびっちりと塞がれていたが、カーテンは剝がされず、そのままになっている。
クーデルカは駆け寄って、その埃まみれのカーテンを手荒に剝ぎ取った。
だいぶ古い物らしく、虫喰いだらけだが、何とかなるだろう。
それらの古い布を裂いて何枚かをつなぎ合わせ、間に合わせのロープを作る。
手近な柱に結び付けて垂らす。下の床までは届かなかったが、あの高さなら飛び降りてもケガはしないだろう。
クーデルカはロープを手繰って、降り始めた。
しかし途中で、鈍い音と共に、ぶっつりとロープが切れた。
幸いにも、だいぶ端近くまで降りていたので、瓦礫の山に倒れ込む形にはなったが、ケガはなかった。
「ちぇ。これでいよいよ、上には登れなくなったな」
エディが悔しげにぼやいた。クーデルカはそれを無視した。
オフラハティーの倒れている所に歩み寄り、脇に膝を突いてかがみ込んだ。

「暗くてよくわからない。エディ、マッチか何か、持ってない？　あたしのランプは、上に置いてきちゃったわ」
エディはポケットを探って、マッチを取り出した。
「さっき、その辺のがらくたの中に、ロウソクがあったな」
エディはすぐに、床に転がっていたロウソクを探し出し、火を点した。
クーデルカはエディの差し出す明りの下で、神父の怪我の具合を見た。
ズボンの腿あたりの布地が裂け、血に染まっている。傷の裂け目からは、折れた骨の断端らしきものが、わずかにのぞいていた。
「神父さん。生きてる？」
クーデルカが耳もとで声を掛けると、オフラハティーはゆっくりと目を開けた。
うめきながらも起き上がろうとするのだが、体が言う事を聞かないらしく、すぐにもとのように倒れ込んでしまった。
「無理しないで。少しじっとしてなさい」
クーデルカはそう言ってざっと具合を見ると、傷口にそっと指先をあてた。
目を伏せ、神経を集中させる。
「止めときゃいいのに。このオッサン、きっと、お前に感謝なんてしないぜ」

「黙ってて」
やがてゆっくりと、クーデルカの手の下で、傷口が塞がっていく。
傷が赤い跡を残してほとんど癒えると、クーデルカは手を離した。
すぐに、オフラハティーは体を起こした。
「……お、お前は……、今、私に、何をしたのだ!?」
「ほら、俺が言った通りだろ、クーデルカ。救ってもらって、この態度だぜ」
エディが、憎々しげにそう言った。
神父はまだ疑わしそうに、自分の脚をしげしげと眺めている。
やがておもむろに立ち上がり、脚の調子を見た。
「……治っている。さっきまで出血し、痛みもひどかったものが……」
信じ難いという表情で、オフラハティーはクーデルカを見詰めた。
「まさかこんな事が。こんな者に、神の奇跡の力が備わることなど、有り得ない……」
クーデルカは無表情に肩をすくめた。
「信じたくなきゃ、信じなくていいって、何度も言ってるでしょ。とにかく、この地下の穴蔵から出る方法を考えてよ」
「いや。助けてもらったのは事実なのだ。礼を言う。今までの私の言葉も、撤回しよう。

事実は事実として、認めなければ」

オフラハティーはそう言ったが、その顔にはありありと、嫌そうな表情がにじみ出ていた。

クーデルカは冷たく笑った。

「無理しちゃって。まあ、いいわ、どうでも。それよりここは、どこだと思う？」

クーデルカは辺りを見回した。

そこはどうやら、地下牢の中のようだった。

部屋の三方は湿った石壁に囲まれ、残る一方向には、頑丈な鉄格子がはまっている。

エディは格子の隅に取り付けられた低いくぐり戸に歩み寄り、両手で強く揺さぶった。

しまいには思い切り蹴りつけさえしたが、ガチャガチャと派手な音が立っただけで、扉も、格子も、ビクともしない。

「ここはだめだ。何とかして、上によじ登るしか、なさそうだぜ」

溜め息をついて、上を仰ぐ。かなりの高さがある。

しかし辺りには踏み台になるものもなく、ロープはさっき切れてしまった。

「下の人の肩に乗って手を伸ばせば、一番上の人は手が届くんじゃない？」

「誰が、その一番下になるんだよ」

「あんた以外に、誰がいるのよ」

クーデルカは素っ気なく言い返す。

「神父さん、そっちには出口は有りそう？」

壁を調べているオフラハティーへ、クーデルカは声を掛けた。

しかし返事は返ってこない。不審に思って見ると、神父はこちらに背中を向け、部屋の奥、石壁の角の辺りを凝視している。

「そこに、何か？」

クーデルカが歩み寄ると、神父は黙って、壁の一点を指差した。

そこには薄暗い中に、奇妙な人物が立っていた。

頭には麻袋をかぶり、体にも、やはり袋のような、黒いぼろぼろの衣をまとって、腰に荒縄を巻いている。ひどく小柄に見えるが、それは腰の辺りで大きく体が前屈しているせいだ。

「……これは」

一目で、それが命を持たないモノであることが、クーデルカにはわかった。

「何者だ、お前は」

神父が尋ねる。

答えの代わりに、低いかすれたうめき声が、袋の奥から漏れてきた。

相手は足を引きずり、神父のほうへと歩み寄った。

謎の人物は神父に手を差し延べた。その指先は、紫色に変色して腐り果て、肉のそげ落ちた部分から、白く骨がのぞいていた。
「うっ」
神父は反射的に、相手の手を振り払った。するとその手は、いとも簡単に手首から離れ、ぼとりと床に落ちた。
「ば、化け物！」
エディが素早く拳銃を構える。
神父も険しい表情で、十字架を握り締めた。
「待って、撃たないで」
クーデルカは謎の人物に歩み寄った。
近くで聞くと、単なるうめき声に聞こえていたものが、何かを必死につぶやいているのであることがわかった。
その語る内容を、クーデルカはなんとか聞き取った。
「わかったわ。あんたの言う通りにしてあげる。だからもう、逝きなさい」
クーデルカが右手のひらを、袋をかぶった人物の頭にかざす。
ほんの一瞬、彼女の手が光を放った。その直後、謎の人物の姿は消えていた。

「今度は何をしたんだ？」
エディが感心しきった口調で、クーデルカに尋ねる。
「ちょっと方向を教えてあげただけよ」
「方向？　何の？」
「迷える魂の逝くべき場所への方向。でも、それがどこにあるのかなんて、聞かないでよ。あたしだって知らないんだから。それより、あんたの出番よ。その壁を撃って」
「銃で？　こんな厚い石壁、拳銃で打ったぐらいじゃ、びくともしないぜ」
「そうじゃないの。よく見ると、ここが一か所、しっくい塗りになってるでしょう。すっかりすすけて、石壁と区別がつかなくなってるけど。ここに埋まっているものがあるの」
クーデルカはロウソクを掲げて壁を照らす。
確かに一か所、色が変わっている場所がある。
「よし。どいてな」
エディは示された壁の前に立ち、狙いをつけて二発、弾を打ち込んだ。
壁に並んで二つ、穴が開いた。
クーデルカは辺りに落ちていた板切れを穴の縁にこじ入れて、壁を崩し始めた。
湿気を吸ったしっくいは、意外なほどにたやすく、ぼろぼろと崩れていく。

「まどろっこしいな。俺が代わろう。しかし一体、何が埋まっているんだ？　お宝か？」
「それは出て来てからのお楽しみよ」
　エディがクーデルカに代わって、作業をし始めると、瞬く間にしっくいが取り除かれていった。
「うわっ。なんだこりゃ！」
　エディがいきなり悲鳴を上げた。
　ほとんどしっくいが取り除かれた後には、石壁にぽかりと穴が開いている。
　その奥に張り付くように埋まっていたのは、人の遺体だった。
　先ほどの人物とそっくりに、頭には麻袋がかぶせられ、体にもぼろの布切れをまとって、腰に荒縄。立ったままの姿で、壁の奥に埋められていた。
　エディが棒の先で突つくと、どさりと音を立てて、死体は床に転がった。
　オフラハティーがかがんでそれを調べる。死体はカサカサに干涸びていたが、土色に変色した手足の皮膚全体に、斑点が広がっているのがわかる。
「……疫病だな。クーデルカ、どういう事なのだ」
「この人は、やはりここの囚人だった。元は貴族だったようよ。でも、陰謀に嵌められて、財産を没収され、ここへ入れられていた。そしてこの湿った地下牢に閉じ込められている間

に、疫病に罹った。看守たちは、疫病の伝染を防ぐためと、病魔の魔除けのために、人柱として、生きたままこの人をここへ塗り込めた。さっきの亡者は、自分の体を掘り起こしてほしいって、言っていた。——ひどい場所ね、ここは、浮かばれない亡者の怨嗟の声が、何重にもこだましている。無防備にすべてを聞いていたら、気が変になりそうよ」
「じゃあ、そうなる前に、ここを出ようぜ。この壁、掘られてた分だけ、薄くなってるはずだ。これなら、崩せそうだな」
　エディは今まで使っていた細い板を捨て、さらに丈夫そうな太い木材を、廃材の山から引き出した。
　それを構えると、エディは勢いをつけて穴の奥に叩き付けた。部屋の壁全体が振動し、細かい石屑が穴の周囲に散った。何度か繰り返すうちに、木材が折れた。
　舌打ちしてエディは木材を放り出し、ごついブーツの踵で、壁の奥を思い切り蹴った。ごそっと、地響きを立てて壁の奥に穴が開いた。
「たいした馬力だな」
　感心するというよりは呆れた風情で、オフラハティーがつぶやいた。
「この世で役に立つのは、神のご威光よりは、てめえの体力だぜ。向こう側は、地下道だな。よし、こんな土牢はさっさと出る」

エディが手足を使ってさらに押し広げた穴をくぐって、一同は牢を出た。

Ⅱ. 10月31日　午後2時

暗く湿った地下道を少し行くと、道は上りの階段になっていた。
上り詰めた先は、鉄製の大扉でとぎれている。
重い扉は鍵を掛けられてはおらず、きしみながら開いた。
扉の向こうは、いきなり豪奢(ごうか)な部屋になっていた。
一同は一瞬、呆気(あっけ)にとられて辺りを見回した。
天井近くに取り付けられた明り取りの窓から、外の光が差し込んでいる。
久しぶりに太陽の光を見るような気がした。差し込む光の角度からしても、まだ昼過ぎあたりというところだろう。
この屋敷に入り込んでから、まだ半日も経っていない。しかし、ひどく長い時間が経ったような気がする。
厚いじゅうたんは埃だらけで、相変わらず長い間、人の手が入れられた様子もないが、明

るくて湿気がないだけ、地下道よりはずっとましだ。
クーデルカはフッと疲労を感じて、手近な箱の上に腰掛けた。
金箔の型押しされた壁紙や、ビロードのカーテンなど、豪華な内装ではあるが、どれも古びている。
部屋自体、幾つもの木箱や埃の積もった武具などが無造作に置かれ、今では倉庫代わりに使われている様子だった。
「素晴らしい！」
あちこちを見て回っていたオフラハティーが、感嘆の声を上げた。
「ここにあるのは、すべて、非常に価値のある物たちだ。この宝剣、銀の鎧、みごとな彫像。木箱の中身は絵画などもあるようだな。これだけの物があれば、貧しさゆえに教会さえ建てられずにいるような村にも、神を称える聖堂を建てることができように」
「寝ぼけたこと言ってるんじゃないわ。ここにあるのは、きっと、監獄に入れられてた貴族たちから絞り上げたお宝よ。血の臭いと囚人たちのうめき声が聞こえてきそう。何が素晴らしいもんですか」
怒りのこもった口調で、クーデルカが応えた。
それを聞いて、エディが皮肉な笑みを浮かべてうなずいた。

「まあ、持ち出して売り払えば、一財産築けそうではある。おおかた、さっき死体になってた流れ者たちも、これが目当てだったんだろう。この屋敷については、財宝が眠っているっていう噂もあったからな。それが本当だったわけだ。しかし俺も別に、素晴らしいとも思わないね。金だけが目当てなら、こんな薄気味悪い場所に来なくてもいいだろう」
「……ほう。お前たちならば、このような財宝を目にすればさぞかし目を輝かすと思ったが」
意外そうな声で、オフラハティーが言う。
「はっ。神の使者のあんたのほうが、よっぽど物質に囚われてんじゃないのか？」
エディが笑い飛ばす。
「財宝のことは、どうでもいいわ。それよりここから先、どうする？ このまま闇雲に歩き回っていても、ここはこんなに広いし、化け物は出るし。ラチが明かないわ」
「管理人はここに入り込む連中を、見境なく殺しまくってるみたいだしな。狂ってるぜ、あいつら。ここの今の当主ってやつは、なぜそれを黙認してるんだ。まさか、そいつの命令なのか？」
「ここの当主が、そんな事を命令するものか！ あの管理人夫婦も、人殺しなどではないと、さっきから私が言っているだろう！」
オフラハティーが凄い剣幕で怒鳴り返した。

「なんであんた、そんなにここの連中の肩を持つ？　だいたい、管理人はともかく、ここの当主に、あんた、会ったことがあるのか？　だいたい本当に、カトリックの司教なのか？　どうも、うさん臭いんだよな」

　エディはオフラハティーを横目に見ながら、疑い深そうにそう言った。

「馬鹿な。私の身分を疑っているのか？　ならば言うが、私の身分はヴァチカンの法王庁が保証してくれるだろう。……そして、ここの当主は、私の古い知り合いなのだ。私は今回、『ある使命』のために、法王庁からこのメネトン修道院へ派遣された。現在の当主が古い知り合いであったのは偶然だ。管理人の話では、当主は聖堂の脇にしつらえた私室のある棟にいる。以前からこもりがちだったそうだが、ここ半月ばかりに至っては、内側から出入り口を塞ぎ、まるで姿を現さないと言う。それであのオグデン夫婦は、私に、当主の様子を見て来てほしいと、頼んだのだ。あの夫婦ももう年で、化け物の巣喰うこの邸内を端まで歩くのが苦痛なのだろう」

「……怪しい話だな。その『使命』ってのは、何なんだ？」

「それは、話すわけにはいかない。機密事項だ」

「とことん食えないオヤジだ。無理やり吐かせてやろうか！」

「粗暴な男だな。お前らのような輩（やから）はこれだから。どうせあの流れ者たちの死体も、欲に目がくらんで、お互いに殺し合った結果だろう。あのオグデン夫婦に罪をなすり付けるのは、止めろ」

「何だと!?　そっちこそいい加減に、俺たちの言う事を信じたらどうだ！　てめえは！」

　エディが怒鳴る。

　クーデルカは箱に座ったまま、二人の喧嘩を冷静に眺めていた。

　今にもエディがオフラハティーにつかみ掛かろうとしたとき、ちりん、と何かが鳴った。

　ガラスの触れ合うような音だった。

　ハッとして、クーデルカは天井を見上げた。

　吹き抜けになった高い天井には、ちょうど二人が立っている場所の真上に、古びた大きなシャンデリアが鎖で吊されていた。

　今、それが左右に大きく揺れ、クリスタルの飾りが触れ合って、チリ、チリ、と音を立てていた。

「落ちるわ、逃げて！」

　クーデルカが叫んだ。

　エディとオフラハティーは同時に見上げ、反射的に飛び退いた。

　次の瞬間、シャンデリアの鎖が切れた。

落下したシャンデリアは床に置かれていた財宝類の上に落ち、派手な音を立てて砕け散った。
キラキラと輝いて床中に散らばるクリスタルのかけらを、三人は呆然と見詰めた。
静まり返った中に、床をきしませて走る足音が響く。吹き抜けになった階段の上だ。
クーデルカがその方向に目をやったときには、すでにエディが、猟犬のような素早さで階段を駆け上がっていた。
重なるように二発、銃声が辺りに響き渡った。同時に、争うような物音と、男のうめき声がする。
「エディ！」
クーデルカもあわてて階段を駆け上がった。オフラハティーがその後から走ってくる。
階段を上り切った先は、吹き抜けを見下ろすことのできる廊下だった。
その中ほどに、こちらに背を向けてエディが立っていた。
足もとには、一人の男が倒れている。身なり、風体からしても、クーデルカたちと同じような生活をしている者らしい。
埃だらけのズボンに、着古した厚手のジャケット、頭にはハンチングをかぶっている。
ズボンの太腿には穴が開き血が流れている。男は痛そうに顔をゆがめて傷口を両手で押さ

えてうめいていた。
エディは右手に愛用の拳銃を、左手には散弾銃の銃身をつかんでいた。
「こいつが俺たちを狙って、シャンデリアの鎖を切ったらしいぜ。そうだな？」
返事をしようとしない男に対して、その腿の傷を、エディは靴底でグイッと踏み付けた。
「うああ！　そ、そうだよ。俺がやった。あんたたちを狙ったんだ。俺が見付けた財宝だからな。横取りされてたまるか！」
「俺たちは、あんなもんには、用はねえんだよ」
エディは逆さに持った散弾銃の銃把で、男の頭を小突いた。
「見るがいい。私の言った通りだったろう。この男がしたように、ここへ押し入った連中は互いに殺し合ったのだ。この男とて、これまでに何人も殺しているんだろう」
やっと追いついたオフラハティーが、勝ち誇ったように言った。
「本当かよ。どうなんだ？」
エディに再び小突かれて、男はベラベラとしゃべり出した。
「お、俺は、財宝目当てで、半年ぐらい前から時々ここへ忍び込んじゃ、お宝を少しずつ持ち出して、外で売り飛ばしてた。で、でも、俺は人殺しはしてねえよ！　ここにある流れ者たちの死体は、皆、あの管理人夫婦の仕業だ。俺はたまたま、あいつらに見付からないです

んだから助かった。でも、他にここへ入り込んで奴らに見付かった連中は、皆やられた。俺は見てたんだ。いきなりライフルで撃たれた奴もいたし、頭を割られた奴もいた。ひでえのは、べつに押し入ったんじゃなくても、宿を求めてやってきた物乞いまで、あいつらは殺しちまう。親切そうに門から入れてやって、毒入りの食事をやるんだ。皆、苦しみ抜いて死んだぜ。あいつらは、悪魔だ!!」

「ばかを言うな！　この男は、自分の命が助かりたいがために、あの夫婦に罪をなすり付けているんだ！」

　オフラハティーが激しく男の言葉を否定した。

　エディは首を横に振った。

「どうかね。俺はこいつの言葉を信じるぜ。しかし、俺たちの命を狙ったのは確かだからな、許すわけにもいかない。――どうだ、神父、俺と賭をしようぜ」

　そう言うなり、エディは右手の拳銃を男の頭に突き付けた。

　次の瞬間、エディは引き金を引いた。クーデルカが止める間もなかった。

　頭を半分吹き飛ばされた男は、床にあお向けに倒れ、すでにぴくりとも動かなかった。

「これで俺たちが二度と命を狙われなければ、神父さんの言う通り。神の御使いの勝ちだ。でも、もし、こっから先も、化け物以外で俺たちの命を狙う者がいれば、パリサイ人にも勝

ち目が出てくる。さあ、どっちに賭ける？」

　いとも楽しげに、エディはクーデルカとオフラハティーに笑い掛けた。

　クーデルカはエディをにらみ付けた。

「……あんたが地獄に落ちるほうに、全財産をつぎ込むわ」

　オフラハティーは深く溜め息をついて、男の死体に向かって十字を切った。

「何という事を……。いくら悪党でも、命ある者を、このように……」

　エディは二人の態度をとくに気にする様子もなく、冷酷な笑みを見せた。

「お情け深いな、お二人さん。そんな事じゃ、この厳しい世間を、渡って行けないぜ」

　そう言ってかがみ込むと、エディは男の遺体を探り始めた。

「この上、死体から何かを剝ぎ取ると言うのか！　いい加減にしないか！」

　オフラハティーが怒りのこもった声でたしなめる。

「うるせえな。あんただって、このわけのわからない屋敷から生きて出たいだろ？　こいつが見取り図でも持ってれば、ここから先、だいぶ楽になる。こいつ、ここの構造にやけに詳しそうだったからな」

　エディは死体を探ったが、空の財布が出てきただけだった。次に、脇に落ちていた、男の持ち物であった汚れた布袋を探る。

「あったぜ」
エディが自慢げに言って、汚れた紙切れをヒラヒラさせる。
それは確かに、屋敷の見取り図だった。ただし、一同が今いる宝物倉庫周辺の一部分だけが描かれたものだった。
クーデルカはエディから見取り図を受け取り、広げてみた。
「つまりはこの男本人が使ってた場所だけ、見取り図にしてたってことね。ここ全体の広さから見ればほんの一部だけど、無いよりはマシ。この図によると、ここから渡り廊下で管理人たちの住居のある棟に行けるらしいわ。神父さん、そんなにあたしたちを信じられないのなら、管理人に会いに行ってみる？」
挑むように言って、彼女はオフラハティーを見た。
神父はわずかにひるんだようだったが、すぐに重々しくうなずいた。
「よかろう。私が彼らと話をして、直接事情を聞こう」
三人は見取り図の記述に従って、宝物倉庫をぬけた。
見落としそうな細い階段を上がると屋根裏部屋があり、向こう端に、粗末な木のドアがあった。

かんぬきがかかっているのを外し、開けると、向こうは別棟の屋根裏につながっていた。
隅の天井板が一か所外されて、縄ばしごが脇に置かれている。
「この下が、管理人夫妻の住居につながる廊下らしいわ。あの男は、ここから下の様子をうかがっていたのね」
縄ばしごを降り、廊下に出る。
「ここみたいよ」
見取り図と照らし合わせて、クーデルカは一つのドアを指差した。
確かにそのドアの隙間からは明りが漏れている。中にオグデン夫婦がいるのだろうか。
クーデルカは辺りの様子に気を配り、いつでも逃げられるように身構える。エディも緊張した表情で、いつでも抜けるように腰の銃に片手を掛けている。
二人が部屋の中から死角になる位置に構えているのに対して、オフラハティーだけは堂々と胸を張り、ドアの正面に立ち、ノックをした。
「私だ、オフラハティー神父だ。少し尋ねたい事があるのだが。いないのか？」
ドアの向こうに声を掛けたが、返事はない。
オフラハティーがもう一度ノックをしようとするのを、エディが片手で制した。
黙って後ろへ下がれ、と手振りで告げて、銃を構えたままドアへにじり寄る。

「何をするつもりだ！　私に任せておけ」
オフラハティーが抗議の声を上げたのと、エディがドアを蹴破ったのは、ほぼ同時だった。
エディは銃を構えて、室内の様子を見る。
「……何だ。誰もいないぜ。ちぇ、緊張してソンしたな」
「乱暴な男だ。これでは一目で、押し入った事がわかるではないか」
「わかりやすくて、いいじゃねえか」
エディはズカズカと部屋の中へ入り込み、あちこちを見回した。
「一応、人の住家らしい感じにはなってるが、どうも陰気くせえ部屋だな」
クーデルカとオフラハティーも、部屋に足を踏み入れた。
壁に暖炉が切られ、薪が燃えている。他には窓も明りもなく、薄暗い。
古びた肘掛け椅子や長椅子が置かれたこの部屋は、居間になっているようだ。
奥には別のドアが二つある。
クーデルカが一方のドアを開けてみると、一つは寝室だった。
もう一つのドアを開けて中をのぞく。油臭い、独特の臭いが鼻を突いた。
「何の臭いだろう？」
「油絵の具の臭いに似ているな」

クーデルカの横で、やはり部屋の様子をうかがっていたオフラハティーが言った。
中は真っ暗で、何も見えない。居間のテーブルの上にあったランプに火を点け、部屋の中を照らしながら中へ入った。
室内は、まるで画家のアトリエのようだった。
壁には何枚もの絵画が掛けられ、部屋の中央には、描きかけの絵が置かれたイーゼルが立っている。
床の上には、油絵具のチューブや筆、パレット、絵具のついた布切れ、テレビン油の瓶などが、乱雑に散らばっていた。
「気味の悪い絵ばかりだな。なんだ、この部屋は」
エディが壁の絵をしげしげと眺めて、そう言った。
確かに、眺めて楽しくなるような絵ではなかった。
それらにはすべて、同じモチーフが描かれていた。
同じ船が様々な角度で描かれているのだが、その船は、今にも夜の水面に没していこうとしていた。
船は大型の遊覧船で、手すりのついた広い甲板にはたくさんの人々が乗っている。そして皆、恐怖に顔を引きつらせ、助けを求めて身を乗り出している。

壁を覆いつくすようにビッシリと掛けられた絵画も、イーゼルに置かれた描きかけの物も、すべてが沈没しつつある同じ船の絵なのだった。

クーデルカはそっと指を伸ばし、描きかけの絵に触れた。

まだ乾き切っていない錆朱色の油絵の具が、血のように指先にべたりとこびり付く。

その感触が肌に伝わるのと、その風景が見えたのはほぼ同時だった。

悲鳴が聞こえた。

大勢の声が重なり合い、暗い川面に反響する。時刻は日没直後だろうか。

辺りは夕闇に染まっているが、西の空に赤い残照がまだ残っているようだ。

川幅は広く、流れも早そうだ。その中ほどで、白い瀟洒(しょうしゃ)な作りの客船の横腹に、黒い貨物船が船首を突っ込んでいる。

白い客船の船腹には、プリンセス・アリスと、船の名前が書かれている。

船は横腹の穴から二つに裂けかかって、沈没するのも時間の問題だろう。

悲鳴がますます高まり、人々が落ちて行く水音や船体の裂ける音、気が触れたように鳴らされ続ける汽笛などと混ざり合い、空間を埋め尽くす轟(とどろ)きとなっている。

恐怖に顔を引きつらせた人々が、断末魔の叫びを上げながら水面に次々と飲み込まれて行

く光景は、まさに地獄そのものだった。

『わしのせいじゃない。あれは事故だった。わしはなんとか回避しようと、必死で……。しかしあの日は霧が深かった。あの石炭船は、急に真横に現れた。避けようがなかった。人々が悲鳴を上げて死んでいく。あの声が耳から離れない。許してくれ。どうしようなかったんだ……！』

「また何か、見えたのか」

エディがクーデルカの脇へ来て、尋ねる。

彼女はまだ幻視から覚め切らない、ぼんやりした目付きで、彼を見上げた。

「どこかでプリンセス・アリスという船が沈没した事故が、あったかどうか知っている？　そうね、あれはたぶん、テムズ川の下流、川幅の広くなってる辺り――」

「いつ頃の話だ？」

「わからないけど、だいぶ昔の事みたい」

「――そう言えば、20年程前に、プリンセス・アリス号という遊覧船が、テムズ川流域で沈没した事故があったはずだ。６００人以上の乗客が死んだので、大きな話題になっていたよ

うだな。私は当時ヴァチカンにいたが、イギリス人の旅行者から、その話を聞いたことがある」

「そう。じゃあこの絵は、その事故の様子を描いたものだと思う。でも、誰が画いたんだろう、この絵を。あの風景を見ていたのは、一体、誰？」

クーデルカは考え込みながらつぶやいた。

「おい、こっちに、こんなもんもあるぜ」

エディが部屋の隅から、着古した作業着を拾い上げた。

赤黒い染みがべったりと付いている。絵の具かと思ったが、臭いからしても、そうではないようだった。

「血だな。神父さんよ、これはどう説明する？」

エディはからかうようにオフラハティーに言う。

「にわとりでも絞めたときに、その血が付いたのだろう」

オフラハティーは動じた様子もなく、答えた。

結局、勢い込んで来たわりには何の発見もなく、一同は部屋を出た。

一度宝物倉庫へ戻り、管理人住居と反対の棟へ続く扉を開いた。

まだ足を踏み入れたことのない棟が、そちらにはあるはずだった。

足を踏み入れると、そこは広い吹き抜けのホールになっていた。

四方の壁には天井まで続く作り付けの本棚が設けられ、ビッシリと本が詰まっている。それらの本はどれも非常に年代の古い物であるらしく、背表紙がすり切れ、文字がかすれて読めなくなっているものがほとんどだった。

エディとクーデルカはまるで関心を示さなかったが、オフラハティーは真剣な表情で本棚に取り付いた。

「図書館らしいわね。ここから、他につながる部屋はないのかしら」

「探してみるか」

エディとクーデルカの二人が広い部屋の中を歩き回り、他に部屋はないかと探し回っている間も、オフラハティーは無言で本棚を調べていた。

彼は古びた本を抜き出し、手にとっては一冊一冊表紙を開き、内容を改めている。

「ちょっと神父さん、この本全部、調べるつもり？夜が明けるどころか、何年かかっても終わらないわよ」

クーデルカは呆れたように声を掛けた。しかし神父はそれを無視して、本を確認することに没頭している。

「放っておけ。それよりこっちに、小部屋があるぜ。事務室みたいだが」

エディが部屋の反対端から、そう言った。

クーデルカは神父の側を離れると、エディの後に続いて、小部屋へ入った。

部屋には執務用の机や書類棚、旧式の金庫などが据えられていた。

黄ばんだ書類や机の表面に厚く積もった埃から、もう何年も使われていないことがわかる。

クーデルカは机の上に放置されている古い革装の帳面を開いた。それはかつて、ここが牢獄として使われていた頃の帳簿だった。

囚人たちから没収した財宝類のリストや、管理費、食費などの収支が大雑把に記されている。管理がずさんであったことは、乱雑な書き込みを見れば、素人でも一目でわかった。

他にも湿気を吸ってぼろぼろになった帳面などが何冊か放置されていたが、どれも同じような、昔の帳簿などだった。

古びた金庫の前では、先ほどからしきりにエディが、鍵をいじり回している。

錠はギリシア文字の組み合わせで、開く仕掛けになっているようだ。

「そっちはどう？　開きそう？」

クーデルカが声を掛けたときには、すでに金庫の扉は開き、エディが得意げな表情でこちらを見ていた。

「ずいぶん手慣れているのね」

「今まで、いろいろやってきたからな。こんな古臭い仕掛けぐらいは開けられる」

「いろいろ、ね」

意味ありげに、クーデルカはつぶやいた。一見、気の良い青年のように見えるが、この男には、どこか得体の知れないところがある。

先ほど容赦なく人を撃ち殺した冷酷さからみても、今までにすでに何人か殺していそうだ。

当然、人の金庫を開けるのも、他人の家に忍び込むのも、今回が初めてではないのだろう。

とはいえ、クーデルカもほうも、今まで何度も危ない橋を渡って生き延びてきている。彼を責めることができるような立場ではなかった。

金庫の中から、エディは黄ばんだ紙の束を取り出した。

「手紙の束と、――名簿、かな。かなり昔の物のようだが」

クーデルカは手紙の束を受け取った。

名簿をめくって中を読んだエディは、軽く口笛をふいた。

「すげえな、この名簿。ロンドン塔も真っ青だ。王家の血筋につながる貴族、内政事情に詳しい政治家、一時は勇名を馳せた軍人。――つまりは、特別な事情のあった囚人ばかりを入れていた場所なんだな」

一方のクーデルカのほうは、麻紐で乱雑にくくられた手紙の束をほどき、中の一通を選ん

で便箋を広げてみた。

貴族の紋章の入った、揃いのレターセットだ。

だいぶ古びてはいるが、スミレ色で縁取りをされた便箋からは、ほんの微かに、甘い香りが漂った。

優雅に整った女性の文字で、文章がしたためられている。

『親愛なるわが娘へ

アールデン城で、静かに冬の到来を感じながら、慣れない英語で、これを書き記しています。

あなたを幸せにしてあげることのできない私は、きっと悪い母親なのでしょう。

一時の情愛から多くの人を巻き込み、何の罪もないあなたまでも、遠くウェールズの地に幽閉の憂き目を見させてしまった浅はかさは、いくら悔やんでも悔やみ切れるものではありません。

私はこの先、一生、あなたにも、あなたの兄や姉にも、会うことはないでしょう。

でも、あなたが私のかわいい娘であることに、変わりはないのです。

あなたは私が心の底から愛した人、フィリップ・クリストファーの娘。

あなたの身体にはきっと、彼の面影が深く刻まれていることでしょう。

そしてそれは、あなたが決して一人ではないということ、あなたが祝福を受けて産まれた子供であることの証なのです。

あなたの髪はどんな手触りなのでしょう。あなたの目はどんな色なのでしょう。

叶わぬ願いとは知りながら、あなたに会う日を夢見ずにはいられません。

身体は遠く離れていても、心はいつもあなたと一緒にいます。

くれぐれもすこやかに。

わが娘・シャルロッテへ

母・ソフィア・ドロテア

親愛なるわが娘へ

早いものであなたを授かってから、五回目の夏が過ぎようとしています。

この手紙も、もう二十通は越したでしょうか。

つたない筆ながら、少しでもあなたに気持ちが伝われば、どんなに嬉しいことでしょう。
さて今日は、何のお話をしましょうか。
そうだわ、あなたのお父様のこと。
あなたのお父様であるフィリップ・クリストファーは、スウェーデンの砲兵総監であるフォン・ケーニヒスマルク伯の子として生まれました。
彼はセル公国公爵の娘であった私と、幼い頃からの遊び友達だったのです。
やがて二人は離れればなれになりました。
けれど、国の事情から意に染まぬ婚姻を強いられ、ハノーヴァー伯の后として辛い日々を送る私を、再び救ってくれたのが、あなたのお父様でした。
あの人と私は何年もの間、心のすべてを通じて愛し合いました。
それを密通と呼ぶ人もあるでしょう。
確かに私は、夫のいる身でありながら、別の人を好きになったのです。
けれど、私たちの愛情は、純粋なものでした。少なくとも、政治や権力への欲望にまみれたハノーヴァー伯ゲオルグとの婚姻に比べれば。
ですから私は、フィリップと愛し合ったこと、あなたを産み落としたことを、少しも恥じてはいません。

ただ、あなたに会えないこと、幼いあなたを抱いてあげられないことが、不憫でなりません。
ごめんなさい。やはりあなたの母は、愚かな女です。

わが娘・シャルロッテへ

母・ソフィア・ドロテア

親愛なるわが娘へ

十二回目の誕生日を一緒に祝わせてください。
あなたに神の祝福と恵みがありますように。
プレゼントは何がよいでしょう。
木苺のケーキは嫌いでしょうか。
あなたに美しいドレスを着せ、金の髪飾りとブローチを選んであげましょう。
そして編み目の一つ一つに幸せの願いを込めながら、あなたの髪を結ってあげましょう。
あなたはさながら可愛らしい宝石のように、くるくると宮廷を舞い踊ることでしょう。

愛しいシャルロッテ、元気に育ってくれているでしょうか。
身体など壊してはいないでしょうか。
たとえこの身を引き替えにしても、あなただけは幸せにしてあげたい。
それは叶わぬ願いなのでしょうか。
あなたのことが知りたい。たとえ一目でも、あなたの成長を見てみたい。
毎日毎日、あなたの無事を祈らない日はありません。
私のこれまでの行いを、悔いることはするまいと思いつつも。
愛しています。心より。

わが娘・シャルロッテへ

母・ソフィア・ドロテア』

「……これは、母親が子供に宛てた手紙のようね。だいぶ古い物のようだけど……、日付は、1696年から何年もに渡って書かれてる。同じ差出人の名前で、監守宛てにやはり子供の事を気遣って、きちんと世話をしてくれるよう、頼んでいる物もある。何年にも渡って、出

されてる。差出人の名前は、ソフィア・ドロテア。そして宛名は……シャルロッテ!?」

宛名のシャルロッテとは、先ほど、クーデルカたちを死におとしめようとしたあの少女の霊の名前だった。

クーデルカの脳裏に、あの少女の言葉が蘇る。

『あたしは愛されなかった罪でここに入れられたの』

あの少女は、母から送られた沢山の手紙の事を、知っていたのだろうか。

その言葉によれば、あの子は九才のときに処刑されている。

しかし、母親がシャルロッテに宛てた手紙は、彼女が処刑されたと思われる年を過ぎてもなお、ずっと書き送り続けられている。

つまり、母親はシャルロッテがいつ処刑されたのかを知らなかったのではないか。

そして、ここにこんなにもきれいな状態で手紙が残っているという事は、シャルロッテの手には、これらの手紙は渡されてはいなかったのではないか。

シャルロッテの宛名が記されている封筒の中には、開封されていないものもあるのだ。

シャルロッテは、愛されている事を知らないままに、この世を去った。そのために、いま

だに、この暗い悪意と怨念の渦巻く建物の中を彷徨い続けている。

『愛されなかった罪』ゆえに、闇の中につなぎ止められていると、シャルロッテは思い込んでいる。

「——違うのに。こんなにも、愛されていたのに」

かすかなつぶやきが、クーデルカの唇から漏れた。

誰からも愛されていないと知ることの、強い心の痛みを、彼女は身を持って知っていた。

それは自ら鎧を作り、無関心や憎悪や怒りという武器で心を守らなければ耐えきれないほどの、深い深い痛みであることも。

クーデルカは手紙の束をバッグに入れた。もう一度会うことができれば、あの少女に、この手紙を見せてあげたい。

事務室を出ると、オフラハティーがまだ書棚にへばり付いて、何やら必死の形相で捜している様子だった。

「何か見付かったかい？」

からかうように、エディが言う。

「うむ。おかしな本がここに……」

神父はそう答えて、書棚の中段ほどに置かれた分厚い本に手を掛けた。

「固定されているらしい。動かないのだ。何かの仕掛けでもあるのか」

「どれ、見せてみな」

エディが歩み寄って、問題の本を力任せに引っ張った。

本は思いがけないほど重い響きを立てて、前へ引き出された。

それと同時に書棚全体が、地響きを立てて横へスライドし、その奥に細い階段が現れた。

一同は無言で互いの顔を見交わし、うなずき合うと、階段を上り始めた。

上は屋根裏部屋にでもなっているかと思われたが、意外にも、居心地の良い書斎となっていた。

壁にはやはり本棚がしつらえられており、肘掛け椅子や小卓などの調度品が置かれている。

どれも落ち着いた趣味の良さを感じさせる物ばかりだった。

しかし、そんな中に、ひどく不似合いな物が置かれていた。

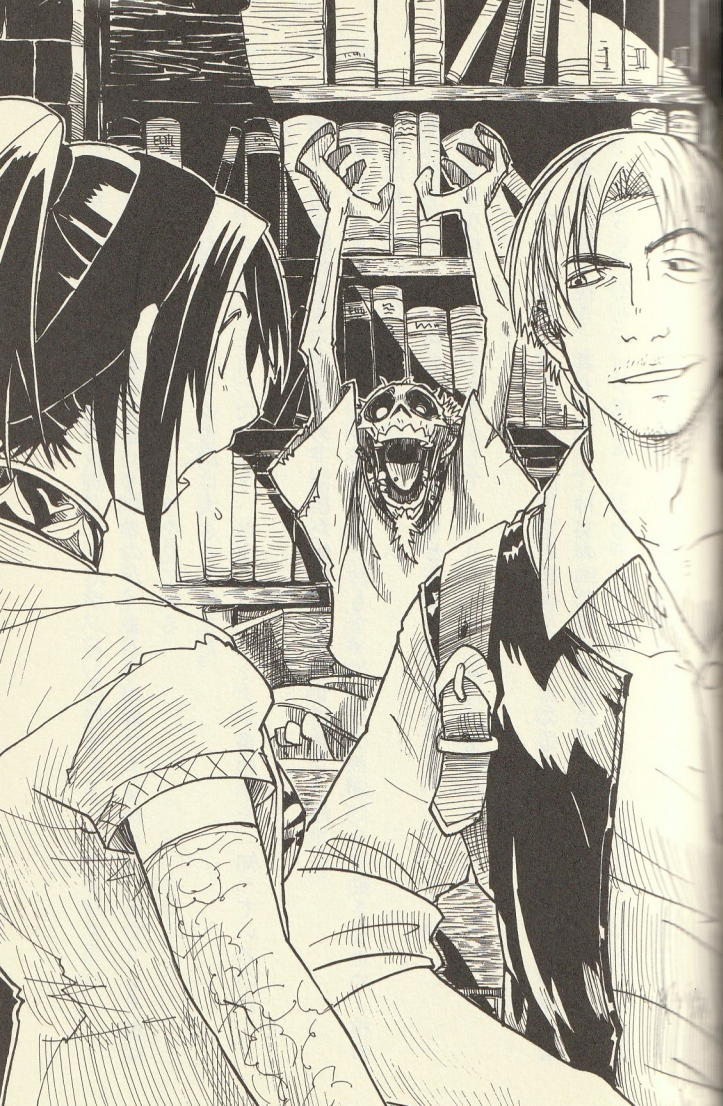
「——これは、何？」

「見た通りなら、黒大理石の棺、ということになるな。中に、何が——？」

クーデルカとオフラハティーが話している横を、エディが棺にずかずかと歩み寄る。

「開けてみりゃわかるんだよ、こんな物は」

言葉と同時に、止める間もなく棺の蓋に手を掛ける。

エディの腕力を持ってしても、その蓋はかなりの重量を持っているらしい。初めは動かないかと思われたが、やがてじりじりと、蓋が横にずれていく。
やがて、バコン、と大きな音を立てて、蓋が床に落ちた。その重みで、床が震えた。
「ちっ。なんてこたあない、単なるミイラだ。きれいに干涸びてやがる。ここに来てから、こんな物は、もう見飽きたね」
エディはつまらなそうに言い捨てて、棺を離れた。
その背後で、むくり、とその干涸びたミイラが、起き上がった。
「エ、エディ、それ……」
クーデルカが驚きの声を上げると、エディはバカにしたように鼻で笑った。
「ミイラが今更怖いのか。幽霊と会話のできるおまえが？　どんな力があっても、やっぱり女はオンナ、って事か？」
「バカ、違う！　後ろ！」
クーデルカの声に、エディは薄笑いを浮かべたまま、振り返った。
「!?　生きてんのか、このミイラは！」
棺の中で半身を起こしているミイラは、ふいに両手を高く差し上げ、甲高い声を上げた。
「……おお、これぞエミグレの栄光！　何人の上にも分け隔てなく訪れるもの、それが死だ。

それこそが神の慈悲、それこそが救済。……だが、わしは死なん！」

クーデルカにはミイラが何を語っているのか、まるで理解できなかった。エディもそれは同じだったようで、ぽかんとしてミイラを見ている。

しかし神父だけが、ミイラの台詞に大きく反応した。

「何!? 今、エミグレと言ったのか？ おまえは、エミグレ書の事を、知っているのか！ 答えてくれ、おい！」

神父は棺に駆け寄り、ミイラの干涸びた体に手を掛けて揺さぶった。

しかし、ミイラはまるでスイッチの切れたおもちゃのように、ぱたりと動きを止め、棺の中に横たわっている。

それ以上、ミイラは何も語らず、ぴくりとも動かなかった。

残念そうな様子の神父をうながして、とりあえず一同は図書室へ下りた。

先に立って歩いていたエディは、図書室の読書テーブルの辺りで、ふと立ち止まった。振り向きざまに銃を抜き、真っ直ぐに、神父の胸に狙いを定めた。

「さっきから見てると、何か探している物があるんだろ？ あんたの使命とやらを、いい加減に教えてもらいたいね。俺はいつも、自分自身の意思で行動してきた。人に利用されるのは大嫌いだ。答えによっちゃ、あんたの頭もぶち抜くぜ」

素早いエディの行動に、神父はその場に凍り付いた。

「私を撃つつもりか？ 武器も持たず、おまえに危害を加えてもいない私を？」

「場合によっちゃあな。さあ、吐けよ、神父さん。あんたはこの屋敷の秘密を、何か知っているんだろ？」

「冗談ではないらしいな」

銃口がぴたりと自分に向けられているのを見て、神父は苦々しげにそう言った。

クーデルカは二人の様子を冷静に見守った。

神父が何かを隠しているのは確かだが、エディをなだめても無駄だろう。

やがて神父は重い溜め息をついて、側にあった古びた椅子を引き寄せる。

「座らせてもらうぞ」

「好きなようにしな」

エディは銃を構えたまま、そう答える。

「さあ、何を聞きたいのだ？」

「まず、あんたの秘密の使命とやらを聞かせてもらおうか」

「そんな事を、おまえが聞いても、何の役にもたたないぞ。きっと、理解もできまい」

「それは俺が決める事だ。いいから話しな」
「よかろう。私がヴァチカンから派遣されてきた司教であることは、すでに話した。その使命とは、以前ヴァチカンの書庫から、何者かによって盗み出された重要な書物を持ち帰ることだ。『エミグレ書』と言っても、おまえには何の事だか、見当も着くまい」
「エミグレ？ さっきミイラが口走っていた言葉か」
「そうだ。そこにはドルイド僧に伝わる古代の秘法が記されている」
「ドルイドか。聞いた事があるぜ。古代ケルトの宗教を司っていた連中だろ」
「よく知っていたな。非常に大雑把な知識だが、間違いではない」
「それで？ 具体的には何が書いてある？ ヴァチカンが大騒ぎして捜し出そうっていうぐらいのシロモノだ、きっと、とんでもない事が書いてあるんだろ」
「生命の神秘についての数々の秘術だと聞かされている。私にも余り詳しいことは知らされていないのだが、生命の蘇りや、不老不死についての記述もあるらしい。そんな物が世間に流布されれば、人々をいたずらに混乱におとしめることになる。何としても回収し、もとのように封印すべきものなのだ」
「それがここにあるって言うのか。この薄気味悪い屋敷の、どこかに」
「この修道院の持ち主が、この場所でドルイドの秘法を用いた邪悪な企てを行っているという情報があったのだ。そして、ここの今の持ち主は、私の古い友人なのだ。名前を、パトリック・ヘイワースと言う。もし、その情報が真実ならば、私は何としても彼を説得し、愚かな行いを止めさせなければならない。私には、古い友人として、その義務がある」

「そんで、そのオトモダチとやらは、どこにいるんだ、今。旧友が訪ねてきても、出迎えもなしか」
「それは前に言った通りだ。あのオグデン夫婦の話では、彼は自分の部屋にこもっていて、まるで顔を出さないらしい。魔物が出没するこの屋敷の様子といい、きっと何か、良からぬことが行われているに違いない」
「……ふうん、ドルイドの秘法か。それはなかなか、おもしろそうじゃねえか」
エディがニヤリと笑ってつぶやいた。
「おもしろいだと？ これは遊びではないのだぞ！」
「真剣だからおもしろいんだろ。もう、お遊びにはうんざりだ」
エディは銃をホルスターに収めた。
「ようやく、つかめてきたな。クーデルカ、お前のほうはどうなんだ？ 何にも言わないが、その金髪の幽霊とやらについて、何かわかった事はないのか？」
エディはクーデルカのほうを向いた。

クーデルカは首を横に振った。
「何もわからない。でも、ここの屋敷に囚われている他の多くの霊たちのように、あの金髪の女も、この場所のどこかに、囚われている霊なのだと思う。何かが、彼女が昇天するのを妨げている。その原因を見付けてあげないと、きっと彼女は、ここから離れられないはず。……そうだわ。神父さんはここの当主の知り合いなのよね？　それなら、このブローチを見た事はない？　ここに彫られている顔に見覚えは？」
　クーデルカは常に持ち歩いている、あのカメオのブローチを取り出した。白い女の顔が浮き彫りにされている。
　神父はそれを手に取って、ろうそくの明りにかざして見た。やがて彼はハッと息を飲み、表情を強張らせた。
「これを……、これをどこで手に入れたのだ？」
「知っているのね？　教えて、これは誰？」
「お前は、この人がすでに死んでいる、と言ったな。霊となって現れたと」
「そうよ。誰なの？」
「いや、そんなはずはない！　彼女が、死んでいるなどという事は。……私の勘違いだ。こんな女は知らない」

　オフラハティーは硬い表情で、ブローチをクーデルカに返した。
　クーデルカは物言いたげな表情で神父の様子をうかがったが、結局それ以上、何も問い掛けようとはしなかった。
　エディはそんな二人の様子を見て、苦笑した。
「何でそんなに、もったいつけるんだ、この神父さんはよ。しかし、すべては、その当主とやらに会えば、わかるんだろう。さっさと行こうぜ。聖堂の脇に当主の住居があるって言ってたな。外から見たときの感じでは、敷地の西側、つまり海側に大聖堂があるようだった」
　エディは、さっき撃ち殺した男から取り上げた見取り図に、ざっと今まで彼らが歩いてきた建物と全体の方角を書き足した。
「ここから、西側の方向につながる廊下を探せば、聖堂にたどり着けるだろう」
「でも、あたしたちが入ってきた扉の他に、出入り口はないみたいよ」
「探してみよう。さっきのミイラの部屋みたいな隠し扉が、どこかにあるかもしれない」

Ⅲ．10月31日　午後11時

図書室の奥には、さらに幾つかの小部屋が隣接していた。そのうちの一つには古い印刷機が据えられていた。調べると、それに隠されるようにして、後ろの壁に小さな扉があるのが見付かった。

小部屋からつながる渡り廊下を通り抜けると、礼拝堂の脇扉へ出た。

広い堂内は暗闇に閉ざされ、手に持ったロウソクの頼りない明りだけが辺りを照らしている。ゴシック様式の高い天井に、三人の靴音がこだまする。

「……この、振動はなんだ？」

エディが不審そうな声を出す。

礼拝堂に足を踏み入れたときから、不気味な地鳴りの音が、辺り中に響いているのだ。時折、何か大きな物が壁に当たるような音もする。

「わからないけど、用心するに越したことはないわね」

クーデルカがロウソクで辺りを照らしながら、そう答えた。

縦に長い堂内に整然と並んだ礼拝席、その脇には鉄の燭台が据えてある。細い燭台にはまだロウソクの燃えがらが残っていた。

「これは、そんなに古い物じゃない。ここ数年ってところだと思う。誰かがここでロウソクを点して、何かをしてたんだ」

ロウソクを調べて、エディが言う。

三人は、残った燃えがらに火を点しながら、広い堂内を歩いていった。

しかし、内陣へ向けて聖堂の奥へ足を運ぶ途中で、石の壁に行く手を遮られた。

聖堂は、半ばほどで、何者かの手によって石壁が築かれ、そこから先へは行けないようになっている。

誰が、何のためにこの壁を作ったのか。その先には、何があると言うのか。

ロウソクを近付けて辺りを照らすと、石壁には数か所、大きな亀裂が入っているのが見える。

エディがさっそく壁に近寄り、亀裂の中をのぞいた。

「向こうが見える？」

クーデルカはエディの背中に語り掛けた。

「見える、が……。一体、あれは、なんだろう。自分で見てみな」
エディは脇へどいて、場所を譲った。
向こう側にも、幾つかの明りが点っているようだ。薄明りの中に、確かに何かが見えた。
クーデルカは亀裂に歩み寄った。
それは初め、上から垂れ下がった太いロープのようだった。
しかし目を凝らして見ると、それらがうごめき、互いに絡まり合いながら、辺りを這い回っているのがわかる。
「……あれは……、何？　蛇の巣でもあるの？　それにしたって、あんなに太く、体長もある蛇が、こんな場所にいるなんて、考えられない……！」
「確かに、信じ難い光景だ。あれは、植物の弦のように見えるが、自らの意思で動いているようだな。……パトリック、お前は、ここで、一体何を行っているのだ……？」
別の亀裂から向こうをのぞいていたオフラハティーが、つぶやいた。
そのとき、正堂内に、鐘の音が鳴り響いた。聖堂に隣接する鐘楼で鳴らしているのだろうか。
耳をつんざくばかりの大きさで、辺り中に鳴り響く。
「鐘？　一体、誰が鳴らしているんだ！　あの管理人夫婦か!?」

エディが驚きの声を上げる。
ふいに、オフラハティーがハッとして顔を上げた。内ポケットから懐中時計を取り出して眺め、舌打ちをする。
「あれは、午前0時を知らせる鐘だ。日付が変わった。今日は11月1日、万聖節だ。嫌な予感がする。何事も起こらなければいいが……」
万聖節とは、古代ケルトの民族にとって一年の始まりを意味する祭礼日である。
この日、生と死の境界は曖昧になり、死者の魂がこの世に出てきて彷徨うのだと、信じられている。
オフラハティーのその懸念を裏打ちするように、石壁の向こうでうごめく物音が激しくなった。
聖堂正面の入り口が、ばたんと大きな音をたて、独りでに開く。
ごうっと、強く風が吹いた。ひどく生臭い臭いがする。
三人の点してきた聖堂内の明りは、一瞬にして吹き消されてしまった。
暗闇の中で、聖堂の天井に近い一点に、微かに明りが見える。
四方からふき寄せる風が、そこへ集中し、その中心がぼんやりと光を放っているのだった。
「……霊気が、高まっている。この敷地内のすべての場所から、この聖堂内に、彷徨ってい

たものたちが、集まってくる気配がするわ」
生臭い風の集まる一点を見据えて、クーデルカが言う。
「見えるのか？」
「まだはっきりと形にはなっていないけど、強く感じる。この場所はよくないわ。一度、逃げたほうがいい。ここにいたら、危ない」
クーデルカの言葉にしたがって、一同は入ってきた扉のほうへと走り始めた。
が、すでに遅かった。
高まった霊気は、ふいに爆発するような光を放ち、辺りを照らし出した。
三人は呆然として立ち止まり、光の塊を見上げた。
次の瞬間、光の球の中に、巨大な怪物が現れた。
翼と爪を持ち、全身を鱗（うろこ）で覆われたその姿は、古代の神話に出てくる竜を思わせた。
怪物は翼を広げ、一言大きく吠えた。その圧倒的な大きさの前には、立ち向かうことなど思いも及ばなかった。
一同は先ほどここへ入ってきた入り口へ向けて、懸命に走った。
そのすぐ後ろを、怪物が追ってくる。
エディが先頭に立ち、ついでオフラハティーが、入り口の門をくぐり抜けた。

クーデルカは倒れた燭台につまずいて、一瞬遅れをとった。
その隙に、怪物が入り口の門に突進する。
巨大なその体躯（からだ）はとうてい門をくぐれるはずもなかった。
怪物は入り口に体ごとぶつかり、門は瓦礫の山で埋まってしまった。
入り口が埋まってしまったのを見て、クーデルカはすばやく方向を変えて走り出した。正面にあった、別の扉へ向かう。
その門をくぐり抜けると、直後に、背後で大きな地響きがした。
怪物が再び体当たりをしたのだろう。振り向くと、今出てきた扉は大きな柱で塞がれてしまっていた。
こちらから聖堂に戻ることができなくなったが、化け物のほうでも、こちらへ出てくるのは容易ではないだろう。
クーデルカが走り出た先は、建物に周囲を囲まれた中にある中庭だった。
「はぐれちゃった。他の二人は無事かな」
背後の聖堂内で怪物が暴れる気配を気にしながら、辺りを見回す。
あちこちの隅に苔むした女性の石像が数体、置かれている。
中ほどには水の流れる噴水があり、それを囲むように数段の石段がある。石段の下にも、

さらに庭は続いている。
噴水の水盤は岩山を模した造りになっていて、上には数体の動物や女性の彫刻が飾られている。それらの像から水が吹き出し、滝のように流れ落ちている。
水の匂いを嗅ぐと、急に、自分がひどく喉が渇いていることに気付いた。
クーデルカは噴水に手を浸し、両手のひらに水を受けた。
水は冷たく、澄んでいて、飲んでも差支えはなさそうだった。
喉の渇きを潤し、ついでに汗と埃に塗れた顔ごと水につけて洗う。
冷たい滴をしたたらせながら、顔を上げる。
すると、月の光にきらめく飛沫の向こうに、水の流れに隠されるように石の扉があるのが見えた。
不審に思って身を乗り出す。確かに扉のようだ。目立たないように工夫はされているが、引き手らしいものも取り付けられている。
クーデルカは一瞬ためらったが、すぐに決意して、噴水の飛沫の中をくぐった。
ほんの一瞬だったが、全身がずぶ濡れになった。
流れ落ちる水の裏側と水盤の間には、水を避けることができるだけの狭い空間があり、石壁に小さな扉が取り付けられている。

引き手に両手を掛け、思い切って引き開ける。重い手応えと共に、扉は開いた。
そこは小さな部屋になっていた。
ランプの明りに室内の様子がぼんやりと照らされている。
そして部屋の中央には、禍々しい形の物体が置かれていた。
一瞬、クーデルカは目を疑った。
それは、罪人の首を切るのに用いられる断頭台だったのだ。
装置の上部からロープで吊された大きな刃は、薄明りの中でもぎらりと光を放っている。
その周辺にはどす黒い液体が、すっかり固まってこびり付いていた。
その刃の輝きや、辺りの血の染みの様子から見ても、それは近頃まで使われていた物のように見えた。
「どうして？　だってここが牢獄だったのは、ずっと昔の事のはずだわ。なぜ今、ここに、こんな物があるの？　そして、この血は？」
クーデルカはつぶやいた。
気を取り直して、部屋の中を見て回る。すると隅の床に跳ね上げ戸があり、下へ続く細いはしごが掛かっているのが、見付かった。
戸は開けたままになっていて、下からちらちらと明りが漏れてくる。

クーデルカは用心しながら、そっと下の様子をうかがった。

「……うっ」

その様子を一目見て、クーデルカは息をのんだ。

部屋の中央には、鉄の奇妙な形をしたベッドのような物が置かれている。

それは血に塗れ、肉片のようなものが随所にこびり付いていた。

そしてその台の中央には、切り刻まれた女の死体が乗せられていた。

女の体は皮膚を割かれ、内臓を取り出されていた。

取り出された内臓は、天井から下げられた鉄の鉤（かぎ）に掛けられてぶら下がっている。

フッと、気が遠くなった。

あまりの惨状に気が遠くなったというわけではない。

いつもの感覚、誰かの意志が分け入ってくる、あの感覚だった。

『暖かい寝床と、おいしい食事を保証するって、奴は言ったんだ。常宿のホテルはとうとう家賃が払えなくなって、追い出されちまってた。冬のロンドンは寒くて、野宿なんかできやしない。どんな変態じじいが待っていようと、凍死するよりはましだって、思ったんだ。でも、こんな目に遭うのなら、イーストエンドの路上でかちかちになって死んだほうがずっと

良かった。ここは地獄だ。あいつらは悪魔だ。ここで何人もの女が刻まれた。いやだ、あたしは刻まれたくない。助けて。いやだよお。こんな場所で死にたくない。なんで、あたしがこんな目に遭わされるんだ……！』

血を吐くような叫び声と、冷たい刃が体に食い込む感触。血がだらだらと流れて、肌を伝わる。痛み、恐怖、恨み、そして暗黒。

切り刻まれて死んでいった女の怨念をまともに受けて、クーデルカは頭を抱え、その場にかがみ込んだ。

女が死の間際に感じた絶望が、彼女の神経を侵していく。混濁（こんだく）した意識の渦に、巻き込まれそうになる。

息苦しい。吐き気がする。体が思うように動かない。

彼女は這うようにして跳ね上げ戸を離れ、必死で息を吸い込んだ。

何度か荒い呼吸を繰り返すうちに、ようやく手足の感覚が戻ってきた。

やっとの思いで顔を上げたとき、何かがふっと視界の隅を横切った。

次の瞬間、後頭部にガアンと強い衝撃を感じた。そして、何もわからなくなった。

ひどい痛みだ。
なぜだろう。頭が割れるように痛む。
もしかしたら本当に割れているのかもしれない。
さっきから、耳障りな金属音が聞こえてくる。
嫌な音だ。
キイ……、キイ……と、きしむようなその響きは、頭の痛みにいっそう拍車を掛ける。
『嫌な音。でも、どこかで聞いたことがある。この音、何の音だっけ――？』
目を開けた。
黄色い光が、彼女の目を射る。まぶしさに、ズキンと、頭が痛む。
目を凝らすと、それは真上につるされたランプの明りであることがわかる。
まだ、うまく焦点があわない。
体を起こそうとして、クーデルカは自分が台に仰向けに寝かされ、縛り付けられていることを知った。
金属音が、フッと止んだ。人の近付く靴音がする。
やがて誰かが、上から覆い被さるようにして、クーデルカの顔をのぞき込んだ。
屋敷の管理人のオグデンだった。

「おまえたちが悪いのだ。おまえたちがエレイン様をあんな目に。エレイン様さえご無事なら、わしもこんな事をしないですんだものを」
片手に握った斧をゆっくりと構えながら、オグデンはつぶやいた。その物騒な刃物には似つかわしくない、ひどく物悲しげな口調だった。
「ま、待って。あんた、何か勘違いしているわ。エレイン、って誰？　あたしは知らないわよ」
努めて冷静な口調で、クーデルカはオグデンに話し掛けた。
この状態で、斧で切り掛かってこられれば、ひとたまりも無くやられてしまうだろう。話しを引き出して、何とか縄を解いて逃げ出す隙を見つけなければ。
「知らない？　エレイン様を知らない？　見え透いた事を言うな。おまえは、エレイン様を襲った、あの盗賊の一味だろう。今までにここへ忍び込んだ者たちは皆、そうだった。あいつらは証拠は持っていなかったが、わしには一目でわかった。みんなロクでもない、流れ者たちだ。しかもおまえは、確かな証拠を持っていたじゃないか。エレイン様から奪っていったあのブローチを。あれは昔、パトリック様がエレイン様に似せて、特別に注文して彫らせたカメオだ。のこのこと、そんな物を持ってここへやってくるとは。わしが気付かないとでも、思っていたのか」
「ブローチ？　そうか、あれが、エレイン……」

カメオに彫られた女、クーデルカの前に現れて助けを求めた女の霊の正体が、いまわかった。

彼女がエレイン。そしてここの当主、パトリックの妻だったのか。

「違うわ、かんちがいよ、あたしはただ、あれを他の男から手に入れただけ。そしてエレインは、あたしに助けてほしいと、願っているのよ！」

「ばかな。エレイン様がおまえのような者に助けを求めたりするものか。エレイン様は本当に、聖母様のように気高く、美しく、お優しい方だった。わしがあの船のことで世間中から非難を浴びたときにも、あのお方だけはわしを信じてくださった。ああ、わしの船……、美しいプリンセス・アリス号」

クーデルカは管理人の住居で見付けた絵、そしてあの幻視の内容を思い出した。

「そうか。あれは、あんたの船だったのね。あの悲惨な事故の光景は、あんたの記憶だった」

「悲惨な事故……。そうだ、あれは悲惨な事故だった。みんな死んだ。どうしようもなかったんだ。石炭船が衝突してきて、あっという間に沈んでしまった。乗客たちもろとも、すべて。わしに落ち度はなかった。エレイン様だけが、わしの言葉を信じて、新しく人生をやり直す手助けをしてくださった。だからわしは、誓った。エレイン様とパトリック様に、一生、忠誠を尽くそうと。なのに。ああ、あの日どうして、わしは、エレイン様のお近くにいなか

ったのか。そうすれば、あんな事にはさせなかった。すべて、おまえたちのせいだ。金ばかりが目当てのならず者たち。すべてこの世から、いなくなるがいい！」

オグデンは斧を振り上げた。クーデルカは息を詰め、それでも最後の一瞬まであきらめまいと、目を見開いて相手を見た。

次の瞬間、辺りに銃声が轟いた。

オグデンの大柄な体が、斧を構えたままで、どうと床に崩れ落ちた。

「……ああ、あなた」

ランプの明りの届かない部屋の隅から、吐息のような細い女の声が聞こえた。

声のしたほうから、オグデンの妻、ベッシーが現れた。彼女は両腕で猟銃を抱え、その銃口からは、細く白い硝煙がたなびいている。

ベッシーは、胸に焦げ跡のある穴を開け、血塗れになって倒れている夫の姿を、悲痛な瞳で見下ろした。

引きつるような泣き声を上げて、ベッシーは猟銃を手放した。ガシャン、と音を立てて、猟銃が床に落ちた。

ベッシーはオグデンの倒れた横に膝を突き、震える指先で、かっと見開かれた瞼（まぶた）を閉じさせた。

「……もう、いいのよ、あなた。もうお終いにしましょう。エレイン様も、こんな事は喜ばれないわ。パトリック様にもエレイン様にも、充分に、あなたは尽くした。もう、休んでいいのよ……」

ベッシーは優しく、オグデンの頭を抱き抱えた。

助かった、のだろうか。

一度は命拾いをしたものの、ベッシーがどういうつもりなのかが、わからない。

クーデルカは緊張に身を硬くし、息を潜めてベッシーの様子を見守った。

やがてベッシーは、そっと夫の遺骸を床に横たえ、クーデルカの縛り付けられている台に近付いた。手には先ほどまでオグデンが握っていた斧が、握られている。

斧を構えると、クーデルカを縛った縄をぶつりと断ち切った。

残りの縄を順に解きながら、ベッシーはクーデルカに話し掛けた。

「ごめんなさいね。こんな思いをさせて。あなたがエレイン様のブローチを手に入れた話は、向こうで聞いていたわ。あのブローチは、エレイン様のお気に入りだった。だからきっと、それを手にしたあなたの前に、エレイン様は現れたのね。エレイン様は、あなたに何をお頼みなさったの？」

「助けて、と彼女は言ったわ。そしてこの場所を、あたしに告げた。それ以上は、今のところ、彼女が何を望んでいるのかわからない」

クーデルカは縄目が赤く残った手首をさすりながら、短く答えた。

「そう。……うちの人はね、昔は大きな遊覧船の船長だったの。それはそれは立派な船でね、それがこの人の誇りだった。でも、大きな事故があって、大勢の人が死んだの。世間の人は、この人を責めたわ。それでこの人、すっかり駄目になってしまった。酒場に入り浸って。優しい人だから、耐えられなかったのね。弱い人なの。でもそんなとき、エレイン様に会って。エレイン様は、あたしたち夫婦がやり直す手助けをしてくださった。パトリック様とエレイン様のエジンバラのお屋敷で働かせていただくことになって。ここは違って、明るくてきれいなお屋敷だった。ああ、あの頃は本当に幸せだった。もう一度、明るい人生が戻ってきたんだ、って思ったわ。……なのに、あんなことが」

「何があったの？」

「パトリック様とうちの人が仕事でロンドンに出掛けている隙に、盗賊が押し入ったのよ。あたしはお屋敷にいたんだけど、すぐに殴り倒されて気を失った。あたしは頭を割られて一週間も寝込んだけど、こうして生きていられたのに、エレイン様はやっぱり殴り倒されて、二度と目をお覚ましにはならなかった。ああ、あたしが代わって差し上げればよかったのに。そうすれば、こんな事にはならなかった。パトリック様も、うちの人も、あんな恐ろしい事

に手を染めずにすんだのに……」

「恐ろしい事って、何？　この修道院で、今、何が起こっているの？　ねえ、教えて！」

クーデルカは台を降り、ベッシーに詰め寄った。

しかしベッシーはどこか遠くの一点を見詰めており、クーデルカの声は耳に届いていないようだった。

「その悲鳴が、耳から離れない。恐ろしい事、罪深い事……。そうだわ。これをあなたに渡しておきましょう。これがあれば、パトリック様のお部屋に入れる。どうか、おかわいそうなパトリック様だけでも、あの場所から救って差し上げて」

ベッシーは腰につけた鍵束から一本を抜き、差し出した。

クーデルカがそれを受け取ると、ベッシーはゆっくりと腰をかがめ、床の猟銃を拾い上げた。

「もう、行かないとね。だいぶ遅くなってしまったわ。この人、ああ見えても、あたしがいないと何もできないのよ。子供みたいなの。こんなに大きな体で。おかしいでしょ」

ベッシーは静かに微笑んだ。そして銃口を自らの頭に当て、引き金を引いた。

銃声と共に血が飛び散り、ベッシーの体はオグデンに折り重なるように床に倒れた。

クーデルカは、呆然とその場に立ち尽くした。

やがて気を取り直すと、もと来た扉を押し開いて、部屋を出た。

中庭に出ると、今まで通ってきた建物を思い返して、この建物群全体の大まかな見当をつけた。

エディとオフラハティーが逃げたのは、クーデルカたちが最初に足を踏み入れた通路の方角だった。聖堂へ戻る通路は破壊されている。

とすれば、彼らはもう一度、図書室へ戻るしかないだろう。

クーデルカは図書室のあると思われる方向へ向けて、中庭を歩き出す。

途中、管理人夫婦の住居の棟から中庭へ出るドアが開いているのを見付けて、建物の中へ入った。

厨房に置いてあったランプを手に入れ、一人で暗い館の中を歩く。

一度通った道をうろ覚えでたどり、何とか、あの宝物倉庫まで行き着いた。

一階の通路から倉庫へ入ると、吹き抜けになった階段の上に小さなロウソクの明りが揺れているのが見えた。

「誰かそこにいるの!?」

用心しながら、声を掛けた。すぐに答えが帰ってきた。

「クーデルカか？　よく無事だったな」

エディが嬉しげに言いながら、階段を駆け下りてきた。

その後ろから相変わらず不機嫌な表情で、オフラハティーがゆっくりと下りてくる。

「おまえ、どうしたんだ、その格好は。震えてるな」

エディがクーデルカを一目見て、眉をひそめた。

噴水の中を二度も往き来した彼女は、まだ全身びしょ濡れで、冷え切っていた。

エディは図書室内のホールに据えられた古い暖炉を調べ、まだ使えそうなのを確認した。脇には、埃を被ってはいるが、一抱えほどの薪も置かれている。

火に当たり、衣服を身につけたままで乾かしながら、クーデルカは二人とはぐれてから起こった出来事を話した。

パトリックとエレイン夫妻の話になると、急にオフラハティーが身を乗り出した。

「エレインが死んだと言うのか!?　バカな、そんなバカなことがあるはずがない！」

「でも、ベッシーはそう言ってたわ。自分で頭をぶち抜く前に語ることまで、嘘をつくはずないと思うけど。パトリックっていうのは、神父さんの知り合いだったわね。奥さんのエレインとも、知り合いだったの？」

少しの間、オフラハティーは苦痛を嚙み締めるような表情で、じっと黙っていた。やがて、彼は重い口を開いた。

「私の家は、アイルランドの港町で小さな商家を営んでいた。貧しくはなかったが、裕福でもなかった。五人兄弟の三番目でな、まあ、親にとっても、良くも悪くもどうでもいい子供だったのだろう。家を継ぐことなど考える必要もなく、学業だけは得意だったので、大学にまで進ませてもらうこともできた。イングランドの名門大学に入った私は、科学を専攻した。仕送りはもらっていたが、いつもカツカツの生活だった。古びた物を着て、固いパンをかじりながら、学業に専念した。

しかし、同じ目標を持った友人たちとの語らいは楽しかった。学問の真理を探求する事においては、貧富の差はなかった。

パトリックと私は気が合って、よく様々な問題について、延々と語り合ったものだった。パトリックは裕福な家の生まれで、頭も切れたし、気のいい奴だった。いつも本にかじりついてこもりがちだった私を、いろいろな場所へ引っ張り出そうとしたよ。

エレインとは、そんな場所の一つで出会ったのだ。彼女は若く、美しく、いつも光り輝くようだった。

私たちはよく三人で、ピクニックや船遊びや、様々な場所に出掛けたよ。

結局、エレインの心を射止めたのはパトリックだった。当たり前の事だと、私は思った。エレインはやはり裕福な家に生まれ育ち、それ以外の世界の事など、まるで知らなかった。私はパトリックと競ったが、勝ち目はなかった。彼は、エレインを必ず幸せにする、と私に誓ったのだ。

パトリックは卒業と同時にエレインと式を挙げた。……私は、心の痛みから何とか立ち直ろうと、神学を志してヴァチカンに渡った。

それ以来、20年以上もの間、彼らとは連絡を取っていなかった。こんな事がなかったら、きっと一生、彼らと会うこともないだろうと、思っていた。

しかし、彼らの事を忘れたことはなかった。

……あのエレインが、死んだと言うのか。パトリックは、どこにいるのだ。一体何をしようとしている……」

物思いに沈みながら、オフラハティーはつぶやいた。

「ますます話しが入り組んできたな。クーデルカの話によれば、そのエレインとかいう女の霊は、いまだ浮かばれずに、ここを彷徨っていると言う。しかも、彼女が死んだのはここじゃない。昔住んでたっていうエジンバラの屋敷だろ。何でここに霊がでるんだよ。大体どうして、そのパトリックって奴は、こんな場所に越してきたんだ。ここはとうてい、人の住める場所じゃない。これはどうあっても、そのパトリックってのに、会いたくなってきたぜ」

なぜかひどく楽しそうな表情で、エディが言う。

クーデルカは不思議そうに、彼を見た。

「人の不幸を楽しそうに。大体、あんたには何の関わりもない事ばかりじゃない。謎を突き止めても、何の得にもならないわよ。どうして危険を冒してまで、あんたはこの屋敷の秘密を探ろうとしてるの？」

「損得じゃない。平穏で退屈な世間には、うんざりしてるんだ。危険こそ、望むところさ。この世に俺の心を騒がすものがあるとすれば、それはまだ見ぬ未知の出来事だけだ」

「お気楽ね。まあ、いいわ。勝手にすれば。服もだいぶ乾いたし、そろそろ行きましょう」

エディとオフラハティーは、途中の図書室でこの屋敷の完全な見取り図を手に入れていた。それによると、宝物庫の地下から、聖堂の地下を通り、その向こうにあるパトリックの住居へ地下道がつながっているらしい。

階段を下り、じめじめした地下道へ入る。壁のランプに火を点しながら、暗く細い道を歩く。すえた臭いが漂い、道のところどころに、腐りかけた人の髪のようなものや、衣服の切れ端などが落ちている。

「この辺りに、上へ登る道があるはずだ」

見取り図と辺りの様子を見比べながら、エディが言う。
その場所は通路よりは少し広がっており、そこから道が三本に別れている。
「この道だな」
エディは右端の道を選んだ。その後について、クーデルカとオフラハティーも歩き出す。
道は緩やかな上り坂になり、やがて上りの階段になっていた。それを上り切ると、小さな木の扉があった。開けると、屋敷の廊下になっている。
「ここはパトリックの住居の隣、修道院の宿舎だな。前に一度通ったが、あのときはすぐに床下に落っこちた」
エディが図面を見ながら用心深く歩き始める。
「上だ。三階の通路がパトリックの住居につながってる」
階段をさらに上り、二階の廊下の突き当たりにあった細い木のはしごを登った。その先は屋根裏部屋があるだけだった。
がらんとした部屋には、壁に幾つかの飾り棚が置かれているだけだ。
「通路なんてないわ」
「おかしいな。ここにもう一つ部屋があって、そこから隣の棟につながっているはずだが」
「……空気の流れがあるな。どこかに窓か、隠し扉があるのではないか」

オフラハティーが手に持ったロウソクの炎の揺れを見ながら、そう言った。
炎の傾く方角からすると、左の壁のある方向へ向けて、空気が流れているようだ。オフラハティーは壁に寄って、そこに置かれた飾り棚を調べた。
「なるほど。隠し扉だ」
オフラハティーが棚板をいじると仕掛けが外れ、棚が動いた。その後ろに入り口が開いている。明りが中から漏れている。
三人は恐る恐る、足を踏み入れた。
そこは今までとはうって変わって、きちんと手入れをされた部屋だった。
中央には白いクロスを掛けたダイニングテーブルが置かれている。その上には明りの点ったロウソクの立った燭台（しょくだい）が置かれ、磁器の食器類がきちんと並べられている。
「何、ここは。誰かがここに住んでいるのかしら」
驚いてクーデルカがつぶやく。
そのとき、どこからともなく細い子供の歌声が聞こえてきた。
クーデルカはハッとして、辺りを見回した。
「シャルロッテ？　ここにいるのね!?」
その声も消えないうちに、ふいにダイニングテーブルが、ふわりと天井近くまで浮き上が

った。食器類が床に落ちてくだけ、同時に、テーブルがクーデルカ目掛けて落ちてきた。

「危ない！」

とっさに、エディがクーデルカを引き戻さなければ、彼女はテーブルの下敷きになっていただろう。

クーデルカはエディの腕を振りほどき、キッと宙を見据えた。

「出てきなさい、シャルロッテ！　あんたに話があるわ」

今までテーブルの置かれていた部屋の中央に、ぼんやりと小さな人影が現れた。

「死ねばよかったのに」

憎悪のこもった口調で、ぽつりとシャルロッテはそう言った。

「出てきてくれたのね。よかった。あんたに渡したい物があるわ。あんたはお母さんからの手紙が何通も送られてきていたことを、知っていたの？」

クーデルカは手紙の束を取り出しながら問い掛ける。

シャルロッテは表情を動かさなかった。

「何を言ってるの？　大人はみんな嘘つきよ。いつかここから出してあげる、お母さんに会わせてあげる、って。何度もあたしは言い聞かされた。でも、全然、そんな事には、ならなかったじゃない。もう、あたしはだまされない！」

「嘘じゃないわ。これを見て。あなたのお母さんがあんたに宛てた手紙よ。ずっとここの看守たちは隠していたのね。何通も何通も、あなたが死んだ後まで、手紙は書かれてる。あなたのお母さんは、何も知らされていなかった。ここへ迎えにきたい、あなたの声を聞きたいって、何度も書いてるわ。あなたは愛されていたのよ、シャルロッテ。愛されなかった罪でこんな場所につなぎ止められていたわけじゃない。あなたがここにいつまでもいる理由なんて、どこにもないのよ。あなたのお母さんは、きっと向こう側であなたと会えるのを待っている。早く行ってあげなさい」

クーデルカはシャルロッテに歩み寄った。

「近寄らないで！」

シャルロッテは警戒をあらわにした表情で、短く叫んだ。

クーデルカは何通かの手紙を取り出し、シャルロッテの場所からでもよく見えるように、広げて床の上に置いた。

「読んであげるわ。聞きなさい」

残りの一通を選んで、読み上げた。

『愛しいシャルロッテ

元気に育ってくれているでしょうか。体など壊してはいないでしょうか。たとえこの身を引き替えにしても、あなただけは幸せにしてあげたい。それは叶わぬ願いなのでしょうか。あなたの事が知りたい。たとえ一目でも、あなたの成長を見てみたい。毎日毎日、あなたの無事を祈らない日はありません――』

「やめて！」

シャルロッテは、両手で耳を塞いで顔を伏せた。

「なぜ耳を塞ぐの。これがあんたの欲しがっていたものでしょう？　何が怖いの？」

「……だって、だって。こんな気持ちは知らない。今までずっと、憎いのと、怖いのと、寒いのと……、そんな事しか知らないもの。こんな気持ちを、どうしたらいいのか、わかんないよ！　……解けていく。今までのあたしが、崩れて行く。あたしを固めてた思いが、溶けちゃうよ！　いやだよ、怖いよ……！」

シャルロッテは泣きながら、クーデルカをにらんだ。

「おまえなんか……、大嫌いだ。お節介！　何でこんな余計なこと……！」

叫び続けるシャルロッテの姿が、徐々に薄くなっていく。

やがて声も小さくなり、完全にその姿は空気の中に紛れて見えなくなった。

「これで、お母さんの所に行けるわね、シャルロッテ。……ねえ、愛されるって、どんな気持ち？」

クーデルカは暗い虚空を見詰めて、寂しげにつぶやいた。

「クーデルカ？」

エディが気遣わしげに、声を掛ける。

クーデルカは振り向いた。すでに冷静な表情を取り戻している。

「さあ、先へ行きましょう」

シャルロッテの居室を調べると、さらに向こうへ抜ける扉があった。錠が下ろされていたが、ベッシーから手渡された鍵で開けることができた。

その扉は、階段のあるホールへつながっていた。左手には中庭へ通じるらしい扉があり、右手には幅広い階段が二階へと続いている。

壁に取り付けられたランプに火を点すと、辺りの様子が黄色い明りのもとに浮かび上がる。一見して、これまでの建物とは様子が違い、住居として住めるよう、きちんと手が入れられていることがわかる。

正面の階段の脇にはドアがある。

開けて中へ入ると、そこは細長い部屋になっており、さらに奥にもう一つのドアがあった。
ふっと、誰かに呼ばれた気がして、クーデルカは奥のドアのほうを見た。
「……この奥に、何かあるわ」
「何かって、何が？」
「さあ、わからないけれど。たぶん、エレインに関係するもの」
クーデルカの言葉に従って、奥のドアを入った。
ランプをかかげて中を照らすと、正面の壁に、大きな肖像画が掛けてあるのが見えた。何年もここに掛けられていたのだろう。表面にはうっすらと埃を被っている。
金の髪を肩に垂らし、白いドレスをまとった若い女。彼女は庭園の中に優雅に立ち、優しく微笑んでいる。
「エレイン！」
肖像画を見たオフラハティーが、小さく叫んだ。
「そう、これがエレイン、ね。来たわよ、エレイン。さあ、あたしにどうして欲しい？」
クーデルカはカメオのブローチを取り出すと、絵の下に置かれた小卓にそれを置いた。
肖像画が、内部からぼんやりと光を放ち始める。
淡い光は、やがてある一つの形を取り始めた。

金の髪、白いドレスの女の姿が、光の中に現れた。澄んだ青い目が、絵に描かれていた以上に際立って輝いている。
「……お久し振りですわ、オフラハティー様。でも、このような姿でお会いすることになるなんて。残念です、とても」
エレインは神父に話し掛けた。
「エレイン……、本当にあなたなのか。あなたが死んだと言うのは、本当なのか」
「ええ。私の肉体は、何年も前に、死にました。けれど、私の愛する夫、パトリックは、それを受け入れることができずに、人が入り込んではいけない領域に、足を踏み入れてしまったのです。一度は命を失った私を、この世に再生させようと。だから私は、こうして魂だけがいまだに彷徨っているのです。私の力では、もう、どうしようもないのです。クーデルカ、だから私は、あなたに助けを求めました」
エレインはクーデルカのほうを見て、うなずいた。
「縁もゆかりもない私のために、ここまで危険をかえりみずに来てくれたのですね。あなたには、いくら感謝しても足りません。私の声が聞こえたあなたなら、きっと、この場所に澱む邪悪なものたちと戦うことができる。どうか私の願いを聞き入れてください」
「ここでは一体、何が行われているの？」

クーデルカは尋ねた。

「パトリックは私の体を再生するために、『エミグレ書』という書物を手に入れ、そこに記された再生の秘術を用いたのです。それは恐ろしい、悪魔の秘法でした。しかし、企ては失敗に終りました。私の肉体は再生されたかに見えましたが、それは心を持たない抜け殻、獣の心を宿した怪物でした。それで私の魂は、いまだにここにこうして彷徨っているのです。いつか訪れる救済を信じて」

「それであたしに、何をしろと？」

「あの怪物を、私の顔をした悪魔を、この世から消し去って欲しいのです」

「そんな事をしたら、エレイン、あなたはもう二度と、この世によみがえることはできなくなってしまうのではないのか!?」

オフラハティーが割って入った。

エレインは悲しげに微笑んだ。

「……それでいいのです、オフラハティー様。私の死は、神様の決められたことだったのでしょう。私はいつも、自らの運命に殉じ、その中で懸命に生きてきました。後悔はありません。定められた生の流れに背いてまで、生き長らえようとは思わないのです。私を生き返らせようというあの人の行いは、間違いでした。私は何度も、あの人の心に語り掛けようとし

ましたが、悲しみに心を閉ざしたあの人は、私を再生させたいという思いに凝り固まっていて、私の声も届かなくなっていました。どうかあなたたちの力で、私の願いを適えて欲しいのです。これが私の、最後の願いです」

そういうと、エレインはもう一度、オフラハティーに笑顔を投げ掛けた。

「あなたとパトリックと私、三人で過ごした遠い日々の思い出は、私の一生の宝物でした。毎日が、本当に輝いて、幸福だった。できることなら、ずっとあのまま、三人で、何も変わらずに過ごしていたかったけれど。それはとうてい無理な事でした。あの頃の輝きを汚さないためにも、どうかこのまま私を、安らかに逝かせて下さい。お願いです、オフラハティー様……」

「エレイン……！」

エレインの姿を包んでいた光が薄れてゆき、やがてその姿は消えた。

オフラハティーの声だけが、暗い部屋に響いた。

Ⅳ. 11月1日 午前3時

悄然（しょうぜん）と立ち尽くすオフラハティーを、エディが軽く背中をつついて促した。
「行こうぜ。彼女の望みを適えてやるのが、あんたの勤めってものなんじゃないのか」
オフラハティーは苦笑を浮かべてエディを見た。
「おまえに私の勤めについて、指図をされるとはな」
「神の御使いの勤めなんてものは、からっきしわからないがね。興味もないし。でも、男としての勤めって事なら、あんたよりはわかってるかもしれないぜ」
「何を言うか、若造が」
オフラハティーは不機嫌にそう言うと、出口のほうへ向き直った。
「先へ進むぞ。パトリックは、一体どこに潜んでいるのだ。奴を見付けて、その企てを何としても止めさせなければ。それにはやはり、『エミグレ書』も必要になるだろう。奴が持ち歩いているのでなければ、この住居内のどこかにあるはずだ。急いで捜さねば」

ぶつぶつ言いながら歩き始めた神父の後に、クーデルカとエディも続いた。
「お堅いだけのガンコオヤジかと思ったら、けっこうカワイイところもあったんだな」
おもしろそうに、エディがつぶやく。
クーデルカも苦笑して、うなずいた。
神父が苦虫を噛み潰したような表情で振り向いた。
「何か言ったか！」
「いいや、何も」

部屋を出て、再びホールへ戻る。厚いじゅうたんが敷かれた正面の階段を上ると、短い廊下が左右に走り、それぞれの突き当たりに一つずつドアがあった。
それぞれを調べると、左のドアが書斎に続いていることがわかった。
最初に書斎に足を踏み入れたエディは、ふいにその場に立ち止まった。
「どうしたの？」
クーデルカは後ろからのぞき込んだ。
部屋の中は、ランプが点されていて、ほの明るかった。四方の壁は天井まで届く書棚で埋められている。

中央には数脚の肘掛け椅子とコーヒーテーブル、片隅には大きな木製の書き物机が据えられている。
じゅうたんが敷き詰められた床の上には、乱雑に本や紙類が散らばっていた。そしてその一角、書棚の前に、奇妙な姿が立っていた。
「誰だ!?」
エディが声を掛けた。
その人物は振り向いた。
「遅かったではないか。ここまでたどり着くのに、そんなに時間が必要かね」
きいきいと甲高い声が、そう言った。
干涸びた体にすり切れた灰色の僧衣を身につけ、杖をついている。
「おまえ、もしや、さっき図書館の上にいた、ミイラじゃないか!?」
信じられない、という口調でエディが尋ねる。
「無礼な若者だ。私はミイラではない。まあしかし、無理もないか。このような姿ではな。私の名はロジャー・ベーコン。先ほどお前さんたちに叩き起こされ、百年の眠りから覚めたところだ。先ほどはまだ寝ぼけていたので、失礼したな」
一気に、ミイラはそう答える。黒ずんで皺だらけの姿ではあるが、口だけはなめらかに動

くようだ。
「百年の眠り? 有り得ない、そんなバカな話が信じられるか。ならばお前は、今は何歳になるというんだ」
オフラハティーが異議を唱える。
「さてな。生まれたのは１２１４年じゃ。１２４７年にはオックスフォードに学び、多くの知識を治めた。その後、フランチェスコ会に所属する修道僧となり、さらに世界の真理を追及することに専念したのじゃ」
「と言うと、十三世紀の、あの魔法博士のロジャー・ベーコンなのか!?」
「その通りじゃ」
「有り得ないことだが……、六百年も生きていると言うのか……」
「普通では、有り得ないことだろう。しかし私は、この場所で、『エミグレ』の秘法によって、永遠の生を手に入れた。お陰でたっぷり時間を掛けて、世界中を回ることができたぞ。まあしかし、見るべきものも見てしまうと、少々疲れてな。ここ百年ほどはここへ戻って、ほとんど寝ておったな」
「エミグレ! お前は、エミグレ書について知っているのだな!?」
「あたり前じゃ。あれは私が、当時の法王の命を受けて一〇年も掛けて筆写したものじゃ。

秘密をよそに漏らさぬよう、法王庁の奥深くに、幽閉されたままでな。本来なら、写本が完成したところで、私も口封じのために処刑されるはずじゃった。しかし私は、うまく逃げ出したのじゃ。

エミグレの秘法については、すべて、一〇年の歳月を掛けて書き写す間に、この頭に入っておった。それでまずは、自分自身の体でためそうと、書に記された『聖地』である、ここへやって来た。その頃すでに、あのダニエル・スコトゥス・アウリゲナが、この修道院を建て、この地に潜む強大な力を封じておった。しかしこの地に潜む力は余りに強く、封じ切ることはできなかったのじゃな。私はそのわずかな片鱗を利用して、不死の秘法を試して見た。成功はしたが……、この姿じゃ。やはりあまり、衆人に勧めようとは思わんな」

「良くしゃべるミイラだな。じゃあ、今は、そのエミグレ書とやらがどこにあるのかは、お前は知らないんだな？」

エディが話しに割って入る。

「この気配からして、ここであの秘術が再び行われていたのは確かなようだし、ここにきっとエミグレ書はあるのではないかと、私も踏んでいるのだが。先ほどから捜しているが、残念ながら、まだ見付からぬな。何百年ぶりかで、あの書を再びこの手にしてみたいものよ」

ロジャー・ベーコンは、そう答えた。

まだ延々としゃべり続けそうなロジャーをとりあえず置いて、三人は書斎のさらに奥の書庫へと場所を移した。

エミグレ書か、でなければ何か手掛かりになりそうなものを、見付け出さなければならない。

奥の書庫も、書類や書物で散らかっていた。ここにも大きな書き物机が置かれている。机の辺りを捜していたクーデルカは、手垢で黒ずんだ革装の帳面を見付けた。

ぱらぱらとめくると、中はパトリックの日誌らしい。

『1895年9月10日・雨

修道院の改修が済み、ようやくオグデンたちと移り住む。

エミグレ文書を入手してから、長い道のりだった。あらゆる古今の暗号文献に照らし合わせても、その解読は困難であり、初めて文書に目を通してからの四年間というもの、片時もその謎が心から去ることはなかった。

生命の秘密と、その力の源に関する幾多の記述。

遠く紀元前数世紀に、ケルト民族によってアレクサンダー大王にもたらされたこのドルイ

ドの秘法は、長い間ヴァチカンの枢機卿たちの手によって、法王庁の奥深く封じ込められてきた禁断の業だ。

それが今、私の手の中にある。

文書に記されたウェールズのこの地にたどり着き、聖人ダニエル・スコトゥスの開いた修道院で、我が妻エレインの再生に着手することができる。

決して、後悔はない。

むろんそれが、神を恐れぬ不届きな行いであることはわかっている。だが、いかに罵られようと、妻への思いを断ち切ることは不可能だ。

願わくば神よ、少しの間だけ、目を閉じていてほしい。

1895年11月16日・雨

調べれば調べるほど、この修道院はおぞましい建物であることがわかる。修道院宿舎が数百年前からの遺骸で埋まっていることは、オグデンの話から聞き知ってはいたが、地下道に足を踏み入れるに及んで、人間の罪業の深さを改めて思い知らされる。あらゆる場所に死者の怨念が渦巻いているのを感じる。

しかしエミグレ書によれば、その怨念の力こそが、ドルイドの秘法を復活させる大きな原動力となるのだ。

この場所を怨念で満たさなければならない。たとえこの身が地獄の炎に焼け尽くされようとも、エレインが再びこの世に生を受けることができるなら、後悔などない。

1895年12月5日・雨

聖堂の地下に埋められていた大釜が、秘密の鍵を握っていることがわかった。写本には記されていたものの、今までその所在を突き止められなかったのは、巧妙な仕掛け扉のせいだ。

大釜は金属でできているように見えるが、その表面はあまりに古び、その文様はあまりに奇態で、とても年代を特定できるものではない。

おそらくは数千年、ことによれば数万年を遡る、人間以前の文明の残したものであるかもしれない。

早急に祭壇を築いて、儀式を行う準備を整えよう。

1895年12月10日・雨

オグデンに命じて、家畜を大量に買い付けさせる。鶏三百二十羽、豚四十三頭をウェールズの市場にて購入。陸路にて運ぶよう手配したが、このところの霧では催促もできない。到着したら忙しくなるだろう。

ドルイドの儀式には、生贄（いけにえ）を捧げることが不可欠だ。大釜を新鮮な血と肉で満たさなければならない。

すべてはそれからだ。

1896年2月24日・雨

三度目の儀式。やはり反応なし。

手順にしたがって祈りを捧げるが、いっこうに霊気が強まる様子がない。

写本に立ち返って検討するが、ところどころ意味が取れない部分があり、なかなか要領を得ない。

儀式の方法に問題があるのか、それとも家畜を生贄にするだけでは足りないのか。いずれにせよ、考え直してみる必要がある。

たとえそれが恐ろしい考えに行き着く道であっても、今さら恐れるものではない。オグデンもきっと、わかってくれることだろうと思う。

1896年3月19日・雨

ロンドンより戻る。特別あつらえで仕立てた馬車は、ずいぶん調子が良いようだ。後ろの籠に女を三人、閉じ込めてある。

イーストエンドの裏通りで娼婦を誘い出し、薬をかがせて馬車の中に連れ込んだのだが、慣れないために手筈（てはず）が調わず、思いのほか手間取ってしまった。

オグデンの助力なしでは、とても成し遂げられなかったに違いない。彼には深く感謝をしている。

1896年3月25日・雨

まだ迷っている。決心が着かないのだ。

たとえエレインを生き返らせるためとはいえ、本当にこのような行いが許されるものなの

か。いざとなると、身がすくむ。
　捕まえた女たちは、ベッシーが面倒を見ている。
　暖かい寝床と食べ物が与えられているのだ。ロンドンの片隅で震えているよりはマシな暮らしだろう。わずかだが、罪滅ぼしになればいいと思う。
　これから私が為(な)すであろう恐ろしい悪行を考えれば、そんなものがどれほどの意味を持つのかは怪しいものだが。

　１８９６年３月31日・雨
　決心せねばならない。決心せねば。

　１８９６年４月３日・嵐
　神よ、私は今日、間違いなく、人が犯してはならない、大きな罪を犯した。
　娼婦たちの血と肉をもってドルイドの儀式を行った。
　大釜の中に彼女たちの生命の残滓(ざんし)を注ぎ込むと、凄まじい勢いで場の霊力が強まっていく

のが感じられる。
　やはり考えていた通り、生贄は人間でなくては充分に効力が発揮されないのだ。なんと恐ろしい秘法だろう。
　彼女たちの断末魔の叫びが、今も耳についてはなれない。
　だが、進まなくては。もはや、後戻りはできないのだから。

　１８９６年４月12日・雨
　再び儀式を行う。
　今回も四人の犠牲者を、ロンドンで調達した。いずれも後腐れのない年老いた者ばかりだが、命を奪うとなると、やはり、後味の良いものではない。
　そのせいか、儀式の後でも、あまり霊力の増加が認められなかった。もっと生命力に満ちた、若い生贄が必要なのかもしれない。
　一体どれだけの犠牲者を飲み込めば、大釜は満足するのだろうか。

１８９６年６月５日・雨

犠牲者が足りない。

ダニエル・スコトゥスの強力な聖蹟に押さえ込まれているため、満足に力を顕現できないのだ。より多くの人間を、この場所で生贄にする必要がある。

七回に渡る儀式で、都合三十六名の娼婦たちを費やしたが、どうにも思うように霊力が上がらない。

私の目指す生命の再生を実現するには、特別に強力な霊力の結界が必要だというのに。方策を講じなければ。もっと効率よく犠牲者を調達する方策を。

１８９６年７月15日・雨

今日やっと、新しい犠牲者の一便が届いた。オグデンの提案で、人買いの元締めに巨額の金をつかませたのは正解だった。彼らは人の命など何とも思っていない連中だ。

娼婦たちは何も知らされず、ただ新しい寝床にありつけることを夢見て、この修道院にくる。わざわざ街で新しい獲物を物色する必要もない。密かに甘い噂を流せば、馬車に乗りたがる女は後を絶たないだろう。

そこで何が行われるのか、語る者は誰もいない。

１８９６年９月９日・雨

五名を解体して大釜の中へ注ぐ。

霊力の増加に、格段の進歩が見られるようになったのは喜ばしい。この頃ではまた、ずいぶんと手際良く作業ができるようになった。

オグデンと二人ではこれ以上効率を上げることは難しいが、さりとて秘密を守るためには、人を雇うわけにもいかない。

そこでマンチェスターの機械製作所に、作業台を発注することにした。一か月ほどかかるようだが、これが届けば、より多くの生贄を処理することができるようになるだろう。

１８９６年10月３日・雨

朝から四人を解体。

昼食を取って、大聖堂の鐘楼の補修を行う。

ベッシー、オグデンと夕食を共にした後、三人を解体。
やはり作業台の効果は大きい。霊力も確実に増加している。この分なら、万聖節までにはエレインを再生させるための準備が整いそうだ。

１８９６年10月14日・雨

午前中六人解体
午後五人。
夕食後一人。

１８９６年11月1日・雨

今日という日を、どれだけ待っただろう。
いよいよ、エレインを再生させるための儀式を執り行う日が来たのだ。
大釜はすべて、娼婦たちの血と肉で満たした。
今やこの修道院は、恐ろしいまでの霊力で満ち満ちている。たとえ聖人と言えど、これほ

ど強い怨念の力に抗することはできまい。
この日のために薬品につけて保存しておいたエレインの遺骸を祭壇に運び込んで、祭儀の呪文を施した。
エレイン、君は今も変わらず美しい。愛している。
死者の国から君を呼び戻そうとする私を許してくれ。

１８９６年11月7日・雨

なんということだ。
すべての希望は去った。
あらゆる努力も、望みも、すべてただの幻だったのだ。
エレインの遺骸を包み込むように伸び上がった生命の木は、確かにドルイドの秘法を顕現するものだった。
無から有を生むのが神ならば、まさにこれはその御業に他ならない。
だがしかし、恐るべき事に、再生して花弁の中から現れ出た私の妻は、昔の姿そのままながら、人間としての魂を失っていた。

まさにそれは、怪物だった。
神よ、これがあなたが私に与えた罰なのか。
何百人の娼婦たちを犠牲にして、私は一体何を為したのか。
生命の再生を信じ、我が妻エレインと再び暮らせる日を夢見て、私は今まで生きながらえてきた。だがもう、何も残っていない。
ただ、血と怨念で満たされた大釜と、心を持たぬ怪物があるだけだ。これが報いか。これが私に用意された結末なのか。
　神よ、あなたに慈悲はないのか。

私に残された道は一つしかない。
あまりに多くのものを私は失いすぎた。
共に力を尽くしてくれたオグデンには詫びる言葉もないが。許してくれ、私にはもう、どうすることもできないのだ。
　今はただ、静かに、妻と共に眠りたい』

　日誌はそこで終わっていた。
　その内容のおぞましさに、クーデルカは読んでいる間にも、体に細かい震えが走るのを抑えることができなかった。
　立ったまま、日誌を読んでいたクーデルカに、オフラハティーが近付いて声を掛けた。
「何かあったのか」
　クーデルカは黙って、日誌を手渡した。
「パトリックの日誌か！」
　ぱらぱらとそれをめくり始めたオフラハティーの表情が、途中から険しいものに変化していった。
「……これは……、パトリックおまえは、何と恐ろしい事を……」
「どうした？　俺にも見せろ」
　エディが側へ寄って、オフラハティーから日誌を取り上げる。
　さすがのエディも、その血なまぐさい内容にはへきえきした様子で、途中で日誌を閉じた。
「しかしこれで、はっきりしたな。パトリックはエミグレの秘法を使ってここで再生術を行っていた。……そうだ。あのミイラのじいさんにこれを見せたらどうだ？」
「ロジャー・ベーコンか。確かに、彼なら、ここの記述から何か発見することができるかも

しれない」
一同は日誌を持って、まだ書斎でごそごそと動き回っているロジャーの所へ戻った。
パトリックの日誌にざっと目を通すと、ロジャーは興味深そうな声を出した。
「ほほう。これは……。おもしろいものを見付けたようじゃの」
「まさに、エミグレの再生の秘法を行う際に起こるであろうことが、ここには事細かに記されておる。素人にありがちな失敗の様子までな。今後もし、この秘法をもう一度行いたいという者がいれば、これはうってつけの手引書になりそうじゃの。……いやしかし、これを読んでもなお、あの術を行おうとする者も、そうはおらぬか」
ロジャーはそう言って、きしむような声を立てて笑った。
「あんたはいくらでも、おもしろがっていればいいわ。でも、あたしたちは、ここに書いてある『再生されたエレインの化け物』を消滅させたいの。何百年も生きているというあんたの知恵を、あたしたちに少し貸してくれないかしら」
クーデルカがそう頼み込むと、ロジャーはその皺の中に埋め込まれているような小さな目を、きらりと光らせた。
「ほほ。人にものを頼まれたことなど、まさに何百年ぶりかの。よかろう、六百年の英知を分けてやろうか。私としては、ここに記された再生の化け物の行く末を見極めてみたい気もするがな。ちと、残念じゃな」
「ええい、よくしゃべるジジイだ。さっさと言えよ、化け物退治の方法を！」
エディがしびれを切らせて、怒鳴った。
「ふむ。何百年経とうと、愚か者の反応はいつも一緒じゃな。さて、再生の術を解くには、そのおおもととなっている大釜の力を封印することじゃ。そのためには強力な聖蹟の力を得たものが必要となる。私は昔、ダニエル・スコトゥスの腕を使い、その後、石像に納めてこの館の中に置いた。いつかまた必要になることも、あるかもしれんと思ったんじゃな。我ながら先見の明があった。その像は、宝物倉庫のホールに飾られて、今も残っているはずじゃが」
「そのダニエル・スコトゥスの腕は、どうやって使うの？」
「釜に投げ込めばよい。それで生命の木は枯れ、再生の化け物の体は生命の源から切り離されるはずだ。しかしその後、切り離された化け物がどのようになるのかまでは、私にもわからんな。なにせ、書物からの知識はあっても、実際に退治したことはないからの。さて、これでよかろう。私はまだ、ここでエミグレ書を探さねば。他にもいろいろ調べておきたいことがあるので、ジャマをせんでくれ」

ロジャーはそう言って、再び書棚に向かって捜し物を始める。
三人は彼を置いて、書斎を出た。
「聖なるかな！　祝福あれ！　すべての苦しみは、いつかは終わるのだ」
背後の書斎で、ロジャーが甲高い声で叫ぶのが聞こえる。
「すべての苦しみは、いつかは終わる？　本当に？　そう願いたいものだわ」
クーデルカは苦笑いを浮かべて、そうつぶやいた。

一度宝物庫に戻り、ロジャーの言っていた像を探す。
それはシャンデリアの下敷きになって粉々に砕けていたが、お陰で像の中に納められた干涸びた腕は、容易に取り出すことができた。
さらに日誌を細かく読んで調べると、大釜は聖堂内の内陣の地下に設置されていることがわかった。
先ほど聖堂に入ったときに、石壁にさえぎられて行けなかった向こう側ということになるのだろう。
見取り図によれば、パトリックの住居棟の地下から聖堂の内陣へは、地下道でつながっているらしい。

住居棟の地下へは、二階の書斎のさらに奥の部屋から降りることができるらしい。
書斎に戻ると、ロジャー・ベーコンの姿はすでになかった。
奥の部屋に入ると、薬品の臭いがつんと鼻を突いた。
「実験室、のようだな。一通りの薬品と器具が揃っている。パトリックは私と同じく、大学で科学を専攻していた。ここで様々な実験を行っていたのだろう」
見取り図にしたがって、壁の中に隠された隠し扉を開いて、細い通路に出た。階段を一度下りて、じめじめした地下通路を通り、再び上る。上り切った先の小さな扉を開けると、聖堂の中に出た。
しかし、先ほどと同じように、石壁で区切られて、そこから先へは行けないようになっている。どうやら内陣の周りは四方を石壁で囲まれているらしい。
しかし、石壁の中央に頑丈そうな鉄扉が取り付けられていることが、先ほどの場所とは違っていた。
エディが扉に手を掛けたが、向こう側から鍵が掛けられているらしく、びくともしない。
「どうするか。拳銃程度じゃ、この壁や扉はびくともしないだろう。いっそ、爆弾でもあればな……」
悔しげに、エディが言う。

険しい表情で鉄の扉をにらみ付けていたオフラハティーが、おもむろに口を開いた。

「そうか、爆薬。先ほどのパトリックの実験室にあった薬剤と器材を用いれば、ニトログリセリンを合成することができるはずだ」

「ニトロを？　できんのかい、本当に。作ってる途中で失敗して、俺たちもろとも大爆発なんてのは、止めてくれよ」

「できるという自信がなければ、こんな事は言わない。正しい知識と技術があれば、化学薬品の合成というのは、そう難しい事ではないのだ。とにかく、先ほどの部屋まで戻ろう」

三人はオフラハティーの言葉に従って、実験室へ戻った。

物珍しそうにさまざまな薬品をいじったり、愚にも付かない質問を繰り返したりする二人の素人に業を煮やして、オフラハティーはエディとクーデルカを実験室から追い出した。

「頼むから、向こうで静かにしていてくれ。ものの二・三時間もあれば、何とかなるだろう」

オフラハティーは書斎に二人を置いて、実験室のドアを締め切った。

夜半もとうに過ぎ、晩秋のウェールズの空気はしんしんと冷え込む。二人は書斎に据えられてあった暖炉に薪をくべ、火を点けた。

クーデルカは炉の前の丸い敷物の上に、直接座り込んだ。疲れた、と思う。

昨日は、まだ夜も明け切らぬ頃に宿を出て、この修道院に向かった。

ここへ入り込んでからは、まともに食事もできないまま、動き回っている。

炉棚に置かれた時計の針は、すでに午前3時を指している。疲れて当然だ。

しかし、今よりひどい状態で夜を過ごしたことなど、何度でもあった。

屋根があり、目の前で暖炉の火が燃えているだけで、ずいぶんマシだ。

「お、いい物があった」

書斎をうろついて、あちこち掻き回していたエディが、嬉しげな声を上げた。

彼のほうを見ると、片手にスコッチウィスキーの瓶を持っている。封を切るのももどかしい様子で、ぐっと、大きく一口飲んだ。

「うまい！　ふう、生き返った気分だぜ。お前も飲むか？」

エディは瓶を投げてよこす。

クーデルカはそれを受けとった。栓を抜いて、用心深く中身の匂いを確認する。

「大丈夫だって。今、俺が飲んだろ。飲めよ、体が暖まるぜ」

エディに促されて、琥珀色の液体を一口含む。カッと灼けつくような感触が、喉から流れ込む。アルコールの流れ込んだ場所から、じわりと体が暖まっていくのを感じる。

しかしクーデルカは、一口で止めた。きゅっと手の甲で唇を拭い、再び栓をして、瓶をエディに投げ返した。

「もういいのか？　遠慮すんなよ。もっと飲めって」
「いらないわ。空きっ腹にこんな物がぶ飲みしてたら、すぐに酔っ払う。この後の事を考えたら、そんな事してられない」
「慎重だな」
「だから今まで、生き残って来られたのよ。イーストエンド辺りで、無防備に酔っ払って歩いてたら、すぐに襲われて丸裸よ。揚げ句は喉首かっ切られて、テムズ川にドボン」
「俺だって、それぐらいの事は言われなくてもわかってる。しかしどうやら、お前はだいぶ荒っぽい人生を歩んで来たみたいだな。生まれはどこなんだ？」
エディはクーデルカの向かい側に、あぐらをかいて座った。
クーデルカの言葉が効いたのか、彼は酒の瓶を床に置き、代わりに巻きタバコを取り出して火を点けた。
「あたしの生まれなんか聞いて、どうするのよ」
「べつに。ひま潰しと好奇心だ」
煙草をふかしながら、エディは答える。その率直で単純な答えに、クーデルカはくすっと笑った。
「変なヤツ。……あたしは、ウェールズ生まれよ。北のほうのちっぽけな村にジプシーたち

の集落がある。そこで生まれて、九歳までいたわ」

「どんな場所だ？　ウェールズの北なら、痩せた土地なんだろうな」

「まあ、控え目に言っても、世界の果てみたいなとこよ。寒くて貧しくて。あそこであたしが得たものって言えば、この体と生まれたときにもらったあだ名ぐらいのものね。あたしたちジプシーはね、生まれたときに、みんな、名前とはべつに、あだ名をもらうのよ」

「お前のは、何て言うんだ？」

「スラトー」

「それはお前たちの言葉だろ。英語の意味は？」

「教えられないわ」

クーデルカはなぜか一瞬ためらい、わずかに頬を赤らめた。

「何でだ？　噂に聞く、ジプシーの秘密ってやつか」

「……まあ、そんなとこね」

「おもしろいな、ジプシーの一族っていうのは。独自の言葉と文化、伝承と習慣、外の人間には漏らさない、山ほどの秘密。そういう一族に生まれつくっていうのは、どんな気分のものなのかな」

エディは暖炉の火を見詰めて、そう言った。

「俺は、ロンドンで生まれた。こう見えても結構、金持ちの家の生まれなんだぜ。親父はそれにふさわしく、実用一点張りの実業家で、一切の無駄を許さなかった。俺はそんな親父に、上から頭を抑え付けられて育った。俺は子供の頃、夢見がちなほうで、物語の本を読んだり、一人で屋根裏にこもって空想のごっこ遊びをしたり。そんな事ばかりしているガキだった。

いつも、いろんな場所を冒険して回ることを夢見ていた。でもそんな事は、親父に言わせれば、まったくの無駄だった。

そんなひまがあるのなら、もっと実用的な事をしろと、いつも説教された。

親父にとっては、夢だの冒険だの、そんな事は単なるたわ言だった。

そうやって怒られるたびに、自分の存在自体を否定された気がした。俺は単なる役立たずなんだ、ってね。反発もしたが、子供の頃は、結局、親父の言う事を聞くしかなかった。

でも、大学入ってすぐの頃、とうとう我慢ができなくなって、家を出た。何年か前の話しだ。それからは、あちこち渡り歩いたよ。……でも、まだ、見付からない」

「見付からないって、何が。何かを捜しているの？」

「それが、実はわからない。自分が捜しているのが、何なのか。たぶん、漠然とした、宝物みたいなものなんだ。ここに来たのも、流れ者仲間のいろんな噂を聞いたからさ。何か今まで経験したことのない、心が躍るような冒険ができそうな気がした。まあ確かに、ここで起

こった事は、ちょっとした冒険ではあったかな。
……俺は、生まれたのが、ちょっと遅すぎた。
アメリカ大西部の開拓や、インドやアフリカのジャングルの探索、そういった華々しい冒険には間に合わなかった。今はもう、世界中の土地が、どこかの国に征服されている。未知の世界なんかない。そんな失われた未知の土地にこそ、俺の捜していた宝物はあったのかもしれない。

　クーデルカ、俺は、おまえが羨（うらや）ましいよ」

　その言葉に、クーデルカはピクリと肩を震わせ、きつい表情でエディをにらんだ。

　しかしエディはじっと物思いに耽っている様子で、クーデルカの表情の変化には、まるで気付いていなかった。

「……羨ましい？　何が？」

「おまえのその力や、その自由な生まれ。神秘的なジプシーの名前を持ち、毎日違う土地で眠る。幽霊たちの姿を見て、その声を聞く。不思議な力で過去の出来事を暴き、人の傷を治す。毎日がぞくぞくするような、スリルの連続じゃないか。俺にもそんな力があれば、どんなにいいか……」

「冗談じゃないわ！」

　クーデルカは、鋭く言葉を叩き付けた。

「あんたなんかに、何がわかるって言うの！　あたしは九才のときに、村を追われた。みんなこの力のせいよ。父さんは、あたしが小さいときに死んだ。あたしは父さんが死ぬ何日も前から、場所も、時間も、死に方も、すべてを言い当てた。母さんは、そんなあたしを憎んだわ。自分の手で殺そうとするぐらい。そして九歳のときに、あたしは村の長老会の裁定で、一族から追放された。そんな子供が、たった一人で、どんなふうに生きてきたと思う？　いっそ殺されたほうが、マシだったぐらいだわ。
冒険？　スリルの連続？　何もわかっちゃいない。
　あんたは泣きながら、物乞いをしたことがある？　一日を食いつなぐために、体を売ったことがあるって言うの？
　夢だの冒険だの、そんなものへの憧れなんて、安全な場所でぬくぬく暮らしていける者だけの特権よ。宝物？　笑わせないでよ！」

　エディは驚いて、クーデルカを見た。

「クーデルカ、何も俺は、そんなつもりで……」

「うるさい！　あんたに何も、言われたくないわ！　あたしが欲しくて、この力を手に入れたとでも思うの？　あたしがどんなに、この力を持っていることを憎んでいたか！　捨てら

れるものなら、とっくの昔に投げ捨ててるわ。……それでも。この力で誰かを救うことができたとき、ほんの一瞬だけこの力に感謝する。あたしが生きていることにも、意味があったんだって、その瞬間だけ感じられるから。

それだけが、あたしの生きがいなのよ！

この力を心の底から憎んでいるけど、それなしでは、生きる意味さえない。こんなあたしの、何が羨ましいって言うの！」

そう叫んで、クーデルカはエディをにらみ付けた。

その琥珀色の瞳には、うっすらと涙が浮かんでいる。

「……俺は……」

エディはそれ以上、言葉を続けることができないようだった。

唐突に、クーデルカはエディにくるっと背中を向けて、横になった。

「少し寝るわ。神父が出てきたら起こして」

体を丸めてそういうと、クーデルカは目を閉じた。

眠れるような気分ではなかったが、それ以上エディの顔を見ていたくなかった。

怒りのあまり、全身が細かく震えている。

ふだん思い出さないようにしている過去の辛い思い出を、思わず口に出してしまったことで、クーデルカ自身もひどく動揺していた。

「……すまなかった」

背後で、ぽつりと、エディの声がした。

「できたぞ。二人共」

オフラハティーの声で、目が覚めた。

初めは寝たフリをしていただけだったが、いつの間にか本当に眠っていたらしい。

体を起こして振り向くと、呆れたことにエディもクーデルカの脇でいびきをかいていた。

「起きなさいよ！」

クーデルカは立ち上がりながら、エディの脇腹を爪先で蹴った。

「いてっ。どうせなら、もう少し優しく起こせよ」

ぶつくさ言いながら、エディが起き上がった。

「——さて。これから私は、この薬であの扉を爆破して中へ入る。エレインの願いを適えるつもりだ」

片手に液体の入ったフラスコを持ったまま、硬い表情でオフラハティーが言った。

「私は、って。あんた一人で行くような言い方ね」

クーデルカが聞きとがめた。神父はうなずいた。
「そうするつもりだ。これはすべて、私の古い友人の引き起こしたこと。私がすべての幕を引こう。何が起こるのかは、わからないが、生死を賭けた作業になるだろう。おまえたちは今のうちに、ここを出てくれ」
「冗談じゃないぜ。ここまで来て、最後のお楽しみはお預けかよ！　ばか言うな。無理やりにでもついていくぜ、俺は。俺の行動は俺自身で決める。指図はさせない」
「あきれた奴だ。そんな理由で、命を失うことになってもいいと言うのか」
「退屈で平凡な暮らしなんて、死んでいるのと一緒さ」
「死にたいって言うんだから、死なせればいいのよ、こんな奴」
クーデルカが口をはさんだ。オフラハティーはクーデルカのほうを見た。
「そう言うおまえも、ついてくるつもりか？」
「あのね、神父さん。あんたは神の領域には、きっとあたしよりも詳しいんでしょう。でも、あの扉から先は、悪魔と怨霊の領域よ。それこそが、ずっとあたしの馴染んで来た場所。あんたよりも、あたしのほうがずっと詳しいわ。あたしの助けが必要なはずよ」
神父は溜め息をついた。
「……わかった。では、行こうか」

通路を戻り、聖堂内の鉄扉の前へ出る。
扉の前に、神父は慎重な手つきで、ニトログリセリンの入ったフラスコを置いた。
三人は少し離れた柱の陰まで、一度さがる。その位置から、エディがフラスコを狙って弾丸を撃つ。
フラスコが砕けるのと同時に、派手な爆発が起こった。爆風で舞い上がった土埃が収まると、扉のあった場所には、ぽっかりと暗い穴が開いていた。
三人は壁の向こうへ足を踏み入れた。
聖堂内は、ステンドグラスから差し込む月の明りに照らされていた。
そしてその中に、黒い巨大なシルエットが浮かび上がっている。
一抱えもある太い幹が、地下から床を突き破って、高く聖堂の天井近くまで伸びている。
幹の途中からは無数の触手が生え、生き物のようにうごめきながら、四方八方に広がっていた。
「凄い……」
一同はその圧倒的な姿に、一瞬声を失った。
気を取り直して、辺りを探る。

日誌の記述によれば、大釜は、内陣の地下に仕掛け扉によって隠されているらしい。
太い幹が床を突き破っている辺りを捜すと、壊れた扉が開いたままになっているのがすぐに見付かった。伸びた触手によって突き破られ、壊れたらしい。
ランプをかかげて、石段を地下へと下りる。
そこは広い地下室になっていた。
中央には、直径15メートルはあろうかというような巨大な釜が置かれていた。そこから絡まりあった触手と太い幹が生えている。
「これが、生命樹の源か」
そうつぶやいて、オフラハティーが辺りを照らしながら歩み寄る。そして何かを見付けたらしく、釜の直前で立ち止まった。
「……パトリック、哀れな……」
「パトリック!? 見付かったの!?」
クーデルカとエディは駆け寄った。
そこには触手に絡まれ、白骨化した遺体が、転がっていた。
遺体は胸に、古ぼけた表紙の書物を抱えている。
「これが、パトリックってひとなの、本当に?」

「たぶんそうだろう。何か胸に抱えている。これは……」
遺体の抱えていた書物を拾い上げる。
「なんだ、それは」
「これこそは、エミグレ書だ。最後までこんな物を抱えていたのか」
「へえ、それがね。ちょっと見せてくれ」
オフラハティーはエディに、その古ぼけた書物を手渡した。
さらに、オフラハティーは遺体の手にあった指輪を外した。
「名前が刻んである。結婚指輪だろう。『エレイン・パトリック。二人の永遠の愛を誓う』
――まちがいない。自ら死を選んだのか、それとも、いやおうなしにこの生命の木の触手に生気を吸い尽くされてしまったのか。いずれにしても、哀れな姿だ」
オフラハティーは指輪を遺体の手に返すと、遺体の前にひざまずき、短い祈りを捧げた。
「パトリック。すぐに神の御前に送ってやるぞ。エレインと共にな」
そう言うと、オフラハティーは地下室の壁際に積んであった灯油の樽に歩み寄った。
「おい、何するつもりだ?」
エディの言葉は耳に入らない様子で、オフラハティーは次々と樽の栓を開け、辺りに油を撒き始める。すぐに床は一面の油の海になった。

「無に返すのだ、すべてを。手伝えとは言わん。逃げるなら今だぞ」
「くどいオヤジだ。ここまで来たら、最期まで見届けてやるよ」
クーデルカは黙って神父を見守っている。
油を撒き終わったオフラハティーは、少し離れて立っていたエディとクーデルカを振り返った。
「では、始めるぞ」
二人は黙ってうなずいた。
オフラハティーは、聖人ダニエル・スコトゥスの腕を取り出した。
そして高らかに主への祈りを詠じながら、大釜の中へ腕を投げ込んだ。
凄まじい轟音と共に、もうもうたる水蒸気が舞い上がった。一瞬、釜の中から放たれた閃光が、辺りを昼間の太陽のように照らし出した。
太い幹が嵐にあったように大きく揺れ動いた。激しくのたうち回りながら、ますます広がってゆく触手に、辺りは一面、覆われつつある。
三人は石段の上まで退避した。
「無に帰するがいい！」
叫びながら、オフラハティーが地下室にランプを投げ込んだ。

床に撒かれた油に引火し、みるみる内に辺りは火の海になった。
三人は聖堂の一階へ駆け戻った。しかし火は、暴れる触手に運ばれ、瞬く間に聖堂の床にも広がった。
すでに鉄の扉の辺りは炎に包まれていて、通り抜けることはできそうになかった。
火と触手を避けるため、聖堂の壁をぐるりと取り巻いて上へと続くらせん階段を、三人は上り始めた。
三人の姿を追うように、触手がうねうねと伸びてくるのをかわし、ドーム型の天井近くの踊り場までたどり着く。
この先は、階段は建物から外へ出て、ドームの上へと続いている。きっと、鐘塔へ続いているのだろう。
三人は一端、そこで足を止めた。この先、ここから無事に出るには、どの方向へ向かえばいいのか。
手すりから身を乗り出して下を見ると、火は徐々に上がってきている。
目の前には生命の木の先端部分が伸び、けいれんするように揺れていた。その頂点に、触手に囲まれるようにして大きな桃色の蕾(つぼみ)が付いていた。
蕾は枝の動きに合わせて、大きく左右に揺れている。

「あれは、何かしら」

「蕾のようだが」

話す間に、蕾はゆっくりと膨らみ始めた。

固く閉じていた巨大な桃色の花弁が、一枚一枚、剥がれていく。

やがて開き切った花の、その中心に、人の姿があった。

金の髪、青い瞳。それはまさしくエレインの肉体だったが、その白い肌には、全身に黒い紋様が、入れ墨のように刻まれていた。

それはあの大釜の表面に描かれていた紋様と、同じ物のようだった。

エレインは三人を見ると、身構えた。ハッとして、クーデルカは他の二人をかばうように、一歩前へ進み出た。

エレインが何事かを語ろうとするように、唇を開く。

と、次の瞬間、その口から悪臭を放つ霊気が吐き出された。

とっさにクーデルカはペンダントを正面にかかげた。ペンダントが白く輝き、霊気を反射させる。

それはいつも、クーデルカが肌身離さず持ち歩いている、お守りだった。

クーデルカは反動で、床に腰から倒れ込んだ。その隙に、エレインは蕾を離れ、聖堂の丸

天井に、張り付いた。まるで蜘蛛(くも)のような動きで、湾曲した天井に逆さに取り付き、恐ろしい早さで移動する。

それを追ってエディが銃を撃つが、その素早さに、なかなか狙いが定まらない。

エレインは天窓から、するりと建物の外へ出て行った

「あれが、例の再生の化け物か。仕留めてやる！」

それを追って、エディが階段を駆け上り始める。

クーデルカは素早く立ち上がると、無言でエディの後を追った。

「待て！　二人共、無茶をするな！　あれを倒すのは私の使命だ。しかも、あれはこの世の生命ではない。銃で簡単に倒せるとは思えない！」

オフラハティーが叫びながら、後を追って走ってくる。

階段を上り切った先は、鐘塔の上だった。

クーデルカがそこへ着いたとき、エディがエレインの胸に弾丸を命中させた。オフラハティーもすぐに上がって来る。

エレインは咆哮(ほうこう)したが、倒れる様子はない。

代わりに胸の弾跡から、胸全体へ向けて亀裂が入った。

ぱりぱり、と皮膚が裂けてゆく。

白い皮膚を破って、下から昆虫のような節を持った細長い脚が何本も現れる。やがてエレインの姿は、顔だけを残して、かつて見たこともないような、巨大で醜い姿に変化した。

エレインの顔をした化け物は、咆哮しながら三人に迫った。

エディが何発もの弾を撃ち込んだが、まるで効き目はない。

そのとき、オフラハティーが大声で主への祈りを捧げながら、十字架をかざして、怪物の前に進み出た。

「神よ、私に今こそ罰を与え給え。愛に破れ、邪な理由から神への道を選んだ私を、この哀れな怪物と共に、地獄の底へ沈め給え……！」

そう叫び、オフラハティーは怪物ににじり寄る。

怪物はうなり声を上げながら、見えない力に押されるように、じりじりと後へ引いた。

オフラハティーは、ついにそれを追い詰めた。

十字架を握った右手で、オフラハティーはエレインを抱き締めた。

地鳴りのような音と共に、二人の周りをどす黒く濁った思念の渦が取り巻いた。

再生の秘法に捧げられた多くの犠牲者と、このネメトン修道院に囚われていた、気の遠くなるような数の亡者たちの怨念のこもった、混沌とした霊気の渦だった。

恐ろしくゆがんだ無数の人々の顔のようなものが、口々に怨嗟の声を上げながらオフラハ

ティーとエレイン、二人の体に取りすがっている。

「エレインの魂の昇天と引き代えに、私はこの身にこれらの汚れを受けよう。私を連れていくがいい、亡者たち……！」

亡霊に取り巻かれ、オフラハティーの姿は黒く紗(しゃ)がかかっているように見える。

その瞬間、曇天(どんてん)の空から、雲を割り、鐘楼へ向けてまばゆい光が降り注いだ。

白い輝きはエレインとオフラハティーの姿を包み、黒く澱んでいた空間を清めていく。

亡者たちが小さな光の玉となって、天に向かって昇っていく。

その中で、エレインの姿が、怪物のものからもとの人の姿へと変わっていった。

やがてエレインはオフラハティーを見て微笑んだ。

その瞳には知性の光が宿っている。

『……さあ、行きましょう。ジェームズ。懐かしいあの頃に、もう一度帰れるわ……』

エレインの姿が宙に浮く。それを呆然と見上げるオフラハティーの腕を、エレインの手が握った。

「……ああ、共に行こう、エレイン。ずっと愛していた……」

オフラハティーの姿もまた、宙に浮いた。

天から注ぐ光の中を、二人の姿は昇っていき、やがて光と共に消えた。

少しの間、残されたエディとクーデルカは、ぼんやりと空を見上げていた。
しかし、足もとから煙が立ち上ぼってくることに気付いたエディが、クーデルカの腕をつかんで叫ぶ。
「おい、早くここから逃げるぞ！」
「逃げるって言っても、ここは行き止まりよ。下の火の海の中に、逃げるつもり!?」
絶望的な気持ちで、クーデルカは叫び返す。
エディは舌打ちをし、鐘塔から下を見下ろした。
聖堂はすでに屋根にまで火が回っているが、反対側に見える屋敷のほうには、まだ火の手は上がっていない。
「あの屋根に、飛び移る！」
「転げ落ちて首の骨を折るのがオチよ！」
「ああ、うるさい女だ！　どうせ死ぬつもりなら、一度、俺に命を預けてみろ！」
クーデルカが返事をしないうちに、エディは荒っぽく彼女の体を抱き上げた。
「跳ぶぞ！」
クーデルカは思わず、エディの胸にしがみついた。

エピローグ
1898年・11月1日　ウェールズ

夜明けの空が、徐々にその明るさを増していく。
朝靄の中に、黒く焼けこげた大聖堂の鐘塔が、その先端を表し始める。
やがてネメトン修道院の建物群が、その全体像を見せた。
しかしそれらは、見る影もない状態となっている。
聖堂の丸天井はほとんどが焼け落ち、無惨な姿を朝の光の中にさらしていた。
それ以外の建物も、いくつかは焼け落ち、またいくつかはすすけた状態で、どうにか建物の形態を保っている。
かつて正門のあった建物も、今は半ば倒壊している。
鉄の扉は健在だが、その脇の壁は大きく崩れ落ちていた。
これならロープを登るまでもなく、簡単に中へ入れそうだった。

その崩れた壁の近くに、粗末なテントが張ってある。
その中から、布をめくって、エディが顔を出した。
「晴れたな」
まぶしげな表情で、辺りを見回す。
テントから這い出すと、エディは大きく伸びをした。
肩越しに、今自分が出てきたテントのほうへ視線をやると、一瞬、何か考え込むような表情をした。
しかしすぐに、眠気を払うように首を振り、もう一度、大きく伸びをした。
テントの中ではクーデルカが、毛布をかぶって眠っている。
浅い眠りの中で、彼女は夢を見ていた。
どこかわからないが、明るい場所で、クーデルカは一人で座っている。
さっきまで、誰かのたくましい腕に守られていたような気がしたが、今は側に、誰もいなかった。
いつものことだ。誰かにすがることのできる安堵感は一瞬のうちに通り過ぎて、後には何も残らない。

一時、ぬくもりを共有して、離れて行くだけ。

『ありがとう』

誰かが彼女にお礼を言って、立ち去っていく。
何人もの人々が、彼女に感謝の言葉を述べていた。
そしてみんな、去っていった。
もう側には誰もいない。また一人になった。
寂しかったけれど、引き留めたりはしなかった。
いつもそうなのだ。みんな彼女に感謝をしても、結局は去っていく。
クーデルカは立ち上がって、歩き始めた。
目の前には白く道が続いているが、行く手は霧に包まれて何も見えない。
それでも、その道を歩いていく。
選ぶまでもなく、他に道はないのだ。
目を覚ますと、弱い朝の光が射し込んでいた。

た。

雲間から青空さえ、かい間見える。10月のウェールズにしては、めずらしい上天気といえ

身支度を整えてテントを出ると、すでに朝日はだいぶその強さを増していた。

クーデルカはうなずいて、乱れた髪をかき上げた。

テントをめくって、エディが声を掛ける。

「起きたか。靄が晴れたぞ」

二人は黙々と荷物をまとめて、それぞれの馬の背にくくりつけ、旅支度を終えた。

「どこへ向かうの？」

馬上のエディを見上げて、クーデルカが尋ねる。

「さあ。今度はドーバー渡って、大陸にでも向かうかな。まだわからない。じゃあ、先に出るぜ」

手綱を取って馬の首をめぐらせ、エディはクーデルカに背を向けた。

クーデルカはじっと、その背中を見詰めた。

とくに別れを惜しむ言葉を口にしたわけでもない。しかし、その瞳には、寂しげな光が宿っている。

ふいに、エディが肩越しに振り向いた。

クーデルカはあわてて、いつもの不機嫌な表情を装った。
「そうだ。一つ聞き忘れたことがある」
「何？」
「おまえのあだ名。スラトーって、どういう意味なんだ？　餞別(せんべつ)代わりに教えてくれよ」
クーデルカは決まり悪そうに、頬を赤らめた。
「……大切なもの。宝物、って意味よ」
クーデルカの答えに、エディはその場に似つかわしくないほど、晴れやかに微笑んだ。
「そうか。……宝物。おまえにぴったりだぜ、クーデルカ」
そう言い残すと、エディは軽く手を振って、馬を出した。
クーデルカも、だんだんと遠ざかっていく背中に向けて、手を振った。
どうせ彼には見えていないが。
「後を追わなくてよいのか？」
きいきいときしむような声がした。
振り向くと、廃墟と化した修道院の壁の崩れ目から、ロジャー・ベーコンが、よたよたと歩み出てくるところだった。
「無事だったのね！　よかったわ」

「なんの。数百年の命を、こんな場所で灰にしてたまるか。それに私は、そう簡単には死なない体じゃ」
「そうだったわね」
クーデルカは笑みを浮かべてそう答えた。
「そうだ。あたし、あなたにプレゼントしたい物があるの。受け取ってくれる？」
そう言うとクーデルカは、バッグの奥に押し込んであった古びた書物を取り出した。
「なんと！　エミグレ書ではないか」
「エディもあたしも、こんな物持ってても仕方ないし、捨てるわけにもいかないわ。これをヴァチカンに持って行きたがってたオフラハティー神父も、もういないし。あんたなら、これについてよく知ってるし。もともと、あんたが書き写したものでしょ。持ってる権利があるんじゃない？」
「まあ、そう言うのなら、私が預かっておこうか。もうすでに、この書の知識は私の頭に入っているが」
そうは言っているが、どことなくロジャーの声は嬉しげだった。
クーデルカがエミグレ書を手渡すと、彼は懐かしげにその表紙をなでた。
やがてロジャーは思いついたように顔を上げた。

「それより、本当に、よいのか。あの男を追わないで。今ならまだ、追いつくぞ」
からかうように、ロジャーが言う。
クーデルカは首を横に振った。
「いいのよ。彼とはまた、いつかどこかで、会えそうな気がするの。縁さえあればね」
「ほ。百年も経つと、女も強くなるのぉ」
ロジャーの言葉に、クーデルカは笑った。
海風が吹いて、彼女のマントの裾をはためかせた。
廃墟の向こうに見える海を眺め、クーデルカはまぶしげに目を細めた。
「さあ、あたしも行かなきゃね」
クーデルカは馬の手綱に手を掛けた。
「それで、おまえさんは、どこに行くんだね?」
先ほどクーデルカがエディにしたのと同じ質問だった。
クーデルカはふっと、遠くを見た。
「……さあ。どこまで行けばいいのか。いつかたどり着くことができるのかしら。私自身のいるべき場所に」
「そりゃあ、おまえさん次第じゃよ。どんな場所からでも、真理への道は開けているものじゃ」
少しの間、クーデルカはじっと黙って、ロジャーの言葉の意味について考えていた。
やがてクーデルカは、笑みを浮かべて、首を横に振った。
「難しいこと言われても、わかんないわ。あんたとも、いつかどこかで、会えるといいわね。それまでに今の言葉の意味、考えとく」
そう言って、クーデルカは軽い動作で馬に飛び乗った。
「会えるとも。世界なんて、結構狭いものよ。少なくとも私のほうは、あと五~六百年は生きとるからな。おまえさんさえ長生きすれば、また会うこともあるじゃろう」
「楽しみね。じゃあ、行くわ」
クーデルカを乗せた馬は、緩やかに歩き始めた。

END

あとがき

Daylight never knows the profundity of Darknight.
Friedrich-Wilhelm-Nietzche
（昼の光は闇夜の深さを知りはしない。フリードリヒ・ウィルヘルム・ニーチェ）

今回のヒロインは、クーデルカという19歳の少女です。
私は彼女を、絶望の果てに開き直ってしまった人として捉えています。
これには自暴自棄とか捨て鉢というのとは、また少し違ったニュアンスがあって、開き直ることによって、過酷な明日へ立ち向かっていくだけの力を得ると言う感じでしょうか。前向きな一種のあきらめ、達観と言ってもいいかもしれません。
でも、若くして達観してしまうというのは、たぶん本人にとって、あまり幸せなことではありません。ふつうであれば、長い年月の間に少しずつ経験を積み重ねて、その結果得られるはずのものを、一足飛びに19歳かそこらで手に入れてしまう。そこには年月の代償としての多大な犠牲がつきまといます。
冒頭に引用したニーチェの言葉(「Ｋｏｕｄｅｌｋａ」のゲームの宣伝用パンフレットに載せられていた言葉ですが）は、クーデルカにとっては当たり前の真実であるのでしょう。そんな彼女の強さは、とても痛々しいし、少し哀れです。
今後も彼女の旅は続いていくようですが、彼女がいつか幸せになってくれるといいな、と思います。
最後に。
大変お世話になりましたＳＮＫ・ＳＡＣＮＯＴＨ関係者のみなさまと、担当編集さんに感謝の言葉を贈ります。ありがとうございました。

夜の街に輝くクリスマスイルミネーションの美しい12月のある日に

是方那穂子（これかた・なおこ）

■ご意見、ご感想をお寄せください。

ファンレターの宛て先
〒154-0023 東京都世田谷区若林1-18-10 みかみビル
株式会社アスキーメディアミックス書籍部
是方那穂子　先生
岩原裕二　先生

ファミ通文庫

クーデルカ
叫喚の館

二〇〇〇年二月三日　初版発行

著者　是方那穂子
発行人　浜村弘一
編集人　浜村弘一
発行　株式会社アスキー
〒一五一-八〇二四　東京都渋谷区代々木四-三三-一〇
電話　〇三(五三五一)八一一一(代)
発売　株式会社アスペクト
〒一五四-〇〇二三　東京都世田谷区若林一-一八-一〇
みかみビル六F　ETM営業部
電話　〇三(五四三三)七八五〇(代)
編集　メディアミックス書籍部
デザイン　矢部正人
写植・製版　株式会社パンアート
印刷　凸版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-7572-0665-8

是方那穂子の著作リスト

レブス
〜神に見捨てられた聖女〜

シルバー事件
〜case＃4.5 フェイス〜

クーデルカ
〜叫喚の館〜

9784757206656

ISBN4-7572-0665-8

C0193 ¥640E

定価 本体640円 +税

1920193006407

発行○アスキー
発売○アスペクト

英国・ウェールズ地方海沿いの断崖に建つネメトン修道院。9世紀頃、聖人と呼ばれる男が彷徨する魔を鎮めるために建立した由緒ある建物――物語は、1898年10月31日に強い霊能力を持った少女・クーデルカが、亡霊の声に導かれその地を訪れたところから始まる。修道院に纏わる忌まわしい噂を確かめようとする青年エドワードと出会い、ともに進むクーデルカ。その行く手に、戦慄の出来事が！